陰に眠りし陽に微睡む

玲雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
陰に眠りし陽に微睡む

【Ｎコード】
Ｎ４２７３Ｒ

【作者名】
玲雨

【あらすじ】
ＴＲＰＧが趣味な娘とまだ呼ばれたい２０代半ばの主人公。
中学時代より続いた央華封神（ハウスルールあり）ＲＰＧキャンペーンの参加者から急な断りの電話。
セッションが出来ないとガッカリした彼女だが、意識が遠くなったと思ったら気付いた時には見知らぬ場所で自キャラに憑依していた。
見た目は子ども、中身は一般人、技能は色々な設定がついたチート仙人の異世界生活の様子。

主人公紹介（前書き）

チート仙人のチート紹介のページです。
主人公の覚え間違いやら勘違いもあるので設定を見るとネタバレがあります。
あと自分用メモから引用しているので言い回しとか変かもしれません。

主人公紹介

【基本】

名前：李　華嵐　（り　からん）

洞府：蓮池翠碧宮

師匠：水蓮娘々　（すいれんにゃんにゃん）　巫蠱、厭魅・厭勝

遥飛翔　（よう　ひしょう）　風水・卜占、禁呪

高論道人　（こうろんどうじん）　召鬼

黄俊圭　（こうしゅんけい）　木行

【能力値】

体力：7　体格：6

器用：9　機敏：8

知識：12　知覚：13

意志：8　仙骨：6

魅力：（知）11

※　普通の人の能力値の平均値は6です。

※　能力値最高は12ですが知覚が裏成功でそれ以上に上がっています。

※　能力値決めの時にハウスルール発動して2回降って好きなの選択なので能力値は高めです。

【技能値】

攻撃／受：15

回　避：18

仙術抵抗：20（＋2）

仙術行使：

◆五遁（木）：10　◆召鬼：10

◆風水・卜占：13　◆禁呪：17

◆巫蠱：２１

◆厭魅・厭勝：１５

【耐久値】
生命値：９１
天命数：７
精神値：９５

【持ち物】
共通
　師匠の一筆
　旋風葉
風水
　時流転化旗
禁呪
　紅綬仙衣（着用：仙術抵抗＋２）
　禁感帯（着用）
　禁術符（行使値２１）
巫蠱
　吹丹煙管（武器：猛害毒、行使値２５）
厭魅・厭勝
　眉目飛刀
　替身符×３

【使役獣】
白蛇　鈴華（りんか）
特殊能力
・幸運をもたらす。
・術者が感覚器官を借りることができる。範囲は無制限。
・人語を話せるようになり、誰とでも会話可能。知能も人並みに上がる。

・人間の姿に変身できる。
・丹息を吐ける。（万金丹）
・人を乗せられるほど大きくなる。

【戒律】

巫蠱

・旨きものを食らい、作り、食わせることを楽しむべし。
命を奪うのは、命を保たんがためと知り、食に感謝を忘れるべからず。
・考を尊び、親子の情をないがしろにすべからず。己が生んだものを子と思い慈しむべし。
されど、己が親なりとて、それを盾にとり、子を苦しむべからず
・美しきはよし、醜きもよし、見た目にまどわされず、本質をきわめるべし。

厭魅・厭勝

・人の情けを知り、苦しむものに慰めを与え、苦しめるものに罰を与えるべし。

風水・卜占

・剣を振るい、汗を流すことを厭うべからず。されど粗暴となるなかれ。

禁呪

・義を貴び、律を守り、令に従い、理をもって行動すべし

五遁

・仁を貴び、おのが信ずる善をなすべし。

召鬼

・礼を貴び、これをもってもろもろに接し、つねに笑みをもって話すべし。
生きるもの、死せるもの、わけへだてをすることなかれ。

【設定】

前世も巫蠱の仙人であり水蓮娘々に師事していた。
とある特殊な事情により命を失ったがその事情により天界や冥界に居ることも出来ず水蓮娘々によって赤子に戻されたらしい。
前世の記憶はおぼろげであまり覚えてはいない。ただ急激な成長はその頃のことが関係しているのではないかと推測されている。
当人にとっては謎だが幼少の頃より五遁木行の術を一通り使え、力に溺れることのないようにとしばらく封印されていた。
木行が使えた理由は前世の天命が尽きたことと関係があるようだとまでは当人も知っている。
自分で弟子をとる段階のはずだが様々な因縁がありすぎて洞をひらくどころではない。
そのことに師匠方は頭を痛めているようだが致し方がないのかと傍観気味。
見鬼(けんき)の才があり鬼(ゆうれい)を術を使わずに見て声が聞ける。

【裏設定】
前世は嵐華(らんか)という名。今世の名は宿命の逆転を願って名の文字を入れ替えて名付けられた。
陰仙に滅ぼされた邑の僅かな生き残りのうちの一人で怪我人を癒すために巫蠱に。
五行宝玉を守る役目を担っていたがかつての仲間であった陰仙によって奪取された。
またその際には自身も囚われの身となり実験のために魂魄に玉を植えつけられ、
発狂し死亡したが玉の適性がありすぎて玉が魂魄と混ざり合っている。
華嵐自身が仙宝となってしまっている状態。その事実を知るのはごく一部の仙人方と天界の上層の方々のみで本人も知らない。
五行の流れのために宝玉は天界でも冥界でもなく央華にある必要があり再度赤子からやり直すことに。

遥飛翔とは前世では同時期に修行を開始したので彼としては弟子としたのは少々複雑なようだ。

※　五行宝玉　（ごぎょうほうぎょく）　オリジナル仙宝

五行の力をそれぞれ秘めた五つの玉で所有者は玉に対応した仙術を使用できるようになる。

秘められた力は巨大で使い方によっては央華が滅ぶらしい恐ろしい仙宝。

【主人公設定】

自分の名前が思い出せない部分的記憶喪失。２４歳。デパ地下勤務とかは覚えている。

李　華嵐に憑依状態で異世界トリップ。華嵐の袖口に入った持ち物だけ持っている状態。

李華嵐自身の記憶や経験は身体に染み付いているようで仙術は使用できる。

主人公は記憶を自在に思い出せるわけではないが一通りのセッションの記憶があるので鈴華とは話が食い違うことは少ない。

木行の行使は魂に玉が移植されてるなどの設定として覚えていたが実は現在の彼女には関係はない。とはいえ、華嵐が覚えていた仙術ではあるので考えている通りの行使値で使用できているのは不幸中の幸いか。

鬼を成仏させるために召鬼を覚えたので幽霊的何かに出会えば思い出すはず。

序章

私の趣味は幾つかあるがそのうちの一つがＴＲＰＧだ。
家庭用ゲームですらネットに繋がるこの時代に珍しい趣味だし二十台半ばの女が趣味とするのはかなり珍しいと思うが、
小学生の頃にリプレイの文庫本をＴＲＰＧとは知らずに読み、中学生ではごく親しい友人を集めて自分がＧＭでセッションをしたという家族、男友達から引き込まれてとかではなく自分からＴＲＰＧにはまり込んだというこれまた珍しい人種だ。
今でも２ヶ月に１度は友人達とセッションをするし、都合がつけばフリーコンベンションというＴＲＰＧをする集まりに参加したりもする。
そこでは話をする知り合いも出来たし、友人とはする予定のないゲームにも参加することが出来たりと身内とは違う楽しみ方があった。
まぁ、接客業についている為に貴重な日曜日休みというものをＴＲＰＧに注ぎ込む程度にはハマってるわけです。
それを後悔するとは思ったことはなかったし、後悔したことは今までは一度もなかったが近頃は少し寂しい事態が起きることがある。

「えーと、マジ？翼」

当日予定していたセッションの参加者が来れなくなったというのがその一つ。
学生の頃とは違って、社会人になるとどうしても抜けれない用事というか
遊びよりも優先しなくてはいけないことというのが後から出てくる。

「マジ、今日は仕事が急遽入って行けなくなった」
「あー、美紗も来れないからなぁ」

「ほんと、悪ぃ」

身内として考えている5人のうち2人が来れないならセッション中止。

これは前から続いている何となくなお約束である。

3人でセッションは出来なくはないけどGMとしての調整が結構面倒だし、

今回は前々から続いている央華封神キャンペーンの続き物なので

私と交代制でGMをしている美沙はともかくとして純粋プレイヤーの翼が来れないのは痛い。

美沙の場合は裏事情とかもちょちょいっと教えて説明できるから楽なんだよね。

「いや、仕事だからしょうがないよ。私から章吾と里々奈には伝えとく」

電話をしながら壁にかけてある時計を見て時刻を確認する。

今は朝7時、集合時間は我が家に10時なのでまだ家に居る時間だろう。

「おう、頼むわ。次のセッションの時は何か美味いもん持ってく」

「お互い様なんだから気にしないでいいさ。美味しい物は楽しみにしてるけど」

「ちゃっかりしてんなー。そういうことで今から仕事いってくる」

「いってらー、翼、抜けてるから気をつけてね」

「一言余分。じゃあ、またな」

電話を終了させると私は子機をベットの上に放り投げ私自身もベットに持たれかける。

「あーセッション中止かぁ」

本来ならすぐにでも二人に電話をかけるべきだけれど、今はその気力がわかない。
半年振りにもなるマスターということで昨夜は気合を入れてルールブックを読み直したし、
シナリオに変な箇所はないかとか敵データに間違いはないか色々と確認したのだ。
だというのにそれが一瞬のうちに無駄……とまではいかないがあまり意味のないものになってしまった。
部屋のテーブルに置いてある五人分のキャラクターシートに私は視線を向ける。
私達が使用するのは１０年ほど前に発売された央華封神ＲＰＧ、文庫本版はもっと前に発売されたのでゲームとしては１５年以上になる。
中華風な世界観に惹かれて中２当時残っていたお小遣いで購入したルールブック
かなりお財布にダメージを与えた行為だったけれどだからこそセッションをしてみようと考えたのだ。
簡単に言えば不老不死を目指す駆け出しの仙人達が悪い相手を倒すという勧善懲悪ものの世界が
シナリオ作成が簡単そうという勝手な思い込みがあったからだけど。
それから１０年近くＴＲＰＧにハマってることを考えれば私には合ったシステムだったのだと思う。

「そろそろ引退なのかもね。華嵐（からん）」

私の初めての持ちキャラである華嵐の名を呟く。
多少の違いはあれど、どのキャラもそろそろ弟子をとっても可笑しくないほどに成長を遂げている。

駆け出しの仙人だなんてもうお世辞にも言えないだろう。

「今度、美紗とラスト考えないと……」

最初は私で途中で美紗が加わっての二人三脚ＧＭ央華封神キャンペーン。

単発セッション数回、後にキャンペーンとして二人三脚という形を取って

立身出世？を遂げた彼等のキャラクターシートを片付けようと手を伸ばした時。

『李っ！』

必死な声が聴こえた。

短いその音が誰かの名を呼んだのだと何故か私は理解した。ストンッと頭の中に入ってきたのだ。

疑いようもなく、声の主はその誰かが大切なのだと理解した私の意識は何故だか急速に落ちていく。

李　華嵐

そう書かれたキャラクターシートの上に私の右手が力なく落ちたと同時に私の意識も完全に落ちたのだ。

序章（後書き）

用語説明

ＴＲＰＧ　（テーブルトーク・ロールプレイングゲーム）
ゲーム機などを使用せず、筆記具、紙、サイコロなどを使用して人間同士の会話とルールブックに記されているルールに従って遊ぶようはルールがあるなりきり遊びみたいもの。

ＧＭ　（ゲームマスター）
ルールブックに記載されたルールに則りゲームを進行させる人。シナリオを作り、大本の話を作り出すのもＧＭの仕事。

ＰＬ　（プレイヤー）
ＴＲＰＧをプレイする人。

ＰＣ　（プレイヤーキャラクター）
ルールブックの世界観に疎って作られたキャラクター。

央華封神ＲＰＧ
央華封神ルールブックの第二版。
今回の物語にはあまり関係ないが仙人に成り立ての道士達を演じることが多い。

1

眩しさに眠りが妨げられる。昨夜、眠る時にカーテンを閉め忘れたのだろうか？
何だか身体がだるいからもう少し眠りたいと寝返りを打ち布団を引き上げようと手を動かして気付いた。
私が今眠っているのはベットの上ではないようで下は何処となく湿り、寝返りを打った所為か頬に少しばかりの痛みを感じた。
無視するには煩わし過ぎるそれに私は渋々と目を開け……閉じた。
目を開けた私の目に飛び込んだのは枯れ葉降り積もる地面とそれに負けじと生える草に
数十年は軽く生えているだろうと思われる太い幹を持つ樹。
私が居るのは人工物が見えない自然の中のようだと寝起きの頭で推測するが、
どうしてそんな雄大な自然の一角に私が寝転んでいるのかが解らない。
……生憎と一般人だし、ドッキリはないだろう。
海外では一般人を対象としてのドッキリはあるようだが、
日本においては色々な問題点を考えてか現在では見かけた記憶はない。
それを考えると今の自分の境遇は友人知人の冗談にもならない冗談企画は、
友人知人にこんなことをする人間の心当たりは残念ながらない。
そうなると怨恨か何かでの誘拐事件ということになるが……
知らぬうちに誘拐され、何処かの山奥に放置って死亡フラグじゃ？

「あー……えっ？」

どうすればいいのかと苛立ちで声を発したがその声が

自分が考えていたよりも高いような気がして疑問の声を上げる。
目を開けて身を起しながら視界に入ったいつもとは違う服装にこれまた疑問に思いつつ。

「あー、あーあーテステス。マイクのテスト中」

右手で喉を押さえながら声を出す。
喉の痛みなどないどころかすこぶる調子が良いのに私のみ耳に届く声はやはりいつもと違う。

「うわっ、どうなってるわけ？」

やっと脳に酸素がまわってきた私は焦りを感じて慌てて今着ている自分の服を探った。
赤いやこれは紅色だろうか？赤系としては深い落ち着いた色合いのあまり見かけたない服を着ている。
重ね着しており中は白いが着物というよりも中華系っぽい。
袖口が広く何か入っているような気がするのでその中に手を入れると触れる物があり
そこから取り出したのは眉と閉じた目が描かれている短めの刀。どうやって入ってたんだろう？これ。
柄のところに布が巻かれているが刀自体に鞘はない。
それを無造作に突っ込んであるとはどういうことだろうか。
いや、そもそもこの袖にはどれだけの物が入ってるのかまだ何か入っている気がする。
一先ず地面に刀を置き袖口から一通りの物を出すことにした。
出てきたのは5枚の文字が書かれたお札みたいなもの、小さな風車、旗と後は懐にあった煙管。
ここまで出して私は嫌な推測が出来ることに気づいた。このラインナップには覚えがある。自ＰＣ華嵐の手持ち道具っぽいのだ。

央華封神では持ち歩いている道具の中でも戦闘に使ったりと急を要する時に使う物は袖口に入れている。
近頃は割り込んで敵の攻撃を止めるか、術で回復するかしかしていなかったので薬の丹系は袖にはなかった。
これはＴＲＰＧ仲間が仕組んだ悪戯かもしれないと思いたいが何故だか私の頭の中にあるこれらの道具の使い方が怖い。
いつの間にこの知識は与えられたのかがわからない。睡眠学習？洗脳？
そもそも本当に私の知識通りにこれらの道具は使用できるのだろうか？取り出した道具で使えそうなのは……
師匠の一筆、どうしようもならないと困った時にお師匠様を呼び出すお助けアイテム。んー、今は使えないって気がする。
禁術符（きんじゅつふ）、敵の術を禁じることが出来るが敵がいない。
替身符（たいしんふ）が３枚、死ぬような攻撃を受けた時に肩代わりしてくれるが万が一のことを考えると使いたくない。まず、札系は全滅。
眉目飛刀（びもくひとう）、口訣を唱えて命じるとチャンバラしてくれる刀。
旋風葉（せんぷうよう）、そよ風を常に吹かせることが出来て口訣を唱えれば１日１回突風を吹かせることが出来る。
時流転化旗（じりゅうてんかはん）、導引という特殊な手の動きで発動する時間を止めるアイテムで持っている中ではかなり最高のアイテムだ。
そして、吹丹煙管（すいたんえんかん）は猛害毒が詰められており使用すれば毒煙が出てくるが敵いないので意味がない。
……回復役の巫蠱仙人のはずなのに袖に入っている物に回復系はないんだよね。
一番術の行使値が高いから他の洞統の道具がメインになるのはしょうがないけどさ。

「眉目飛刀かな？旋風葉だと葉っぱとか舞い散りそうだし」

どんな口訣を唱えるんだったかと考えるまでもなく頭に浮かぶ言葉。

「『目覚めなさい。飛旋(ひせん)』」

私の言葉に目が開き地面に置かれていた眉目飛刀が音もなく浮き上がった。
自分でそこに置いたのだからタネも仕掛けもないことは重々承知している。
だとすれば目の前のこの現象は現実ということになるのだろうか？
焦りながらも何処か冷静に考える私自身に違和感を感じるけど私が李華嵐であれば問題はない。
ＧＭとなる自ＰＣということもあり自己主張をあまりしないように設定を考えた。
美味しい物が出た時は積極的に食べに行く無邪気さを出すがＮＰＣ相手には人見知りをし、
ＰＣ間の時には一歩引いて仲間達を見ているという立ち位置にした。
そうしたら美紗に術会得年齢０歳ということで前世も仙人だったのなら内気ではなく精神が老成している設定を後付けられ、ＮＰＣ相手に人見知りなのは某名探偵のようにバーローをしたくないためと設定が変わった。

「子どもだから声が高い。内面が年寄りだから落ち着いてる。
……仙人だから仙宝を持ってるし、使用できる」

そう考えれば納得できるような気がするが逆にそうだとすると問題があった。
李華嵐を自分のＴＲＰＧで使うキャラクターと考えている私は何だ。
この考え方からすると人格の主は私のはずなのに、この身体は私ではなく李華嵐だ。
頬に触れれば私ではありえないすべらかな肌、その肌に触れる手も幼い。

確か私は李華嵐を7歳の子どもと設定していたはず……

「私が『私』と証明する物がない」

自分が持っている持ち物もまた李華嵐の物で携帯電話などない。
何処か欠けている李華嵐の知識。その為に私は私と認識しているけれどこの身体は私の物ではない。
どうしてこんなことになっているか推測しようにも私には自室に居たはずという記憶しかない。
李華嵐に関しては目覚めるまでの記憶などなく、持っている道具についての知識が残るだけだ。

「あぁ……何より『私』の名は何だった？」

美紗が私の名を呼んでいた記憶があるのにその名が解らない。
翼、章吾、里々奈だって私のことを何がしかの名で呼んでいたはずなのに。
気付いてしまえば自分を自分と証明するものなど何もないことに気づいて恐怖した。
これは李華嵐の身体で、私の名がないのならこの私は李華嵐でしかない。では『私』は何処に居る？……――

1（後書き）

用語集

洞統

五遁　（ごとん）
木火土金水の五行を操る。実際とは少し違う。

変化・幻術
人の姿を変えたり、幻を作り出す。

召鬼　（しょうき）
鬼（き）という幽霊やら天界や冥界の住人の力を借りたり、
使鬼という作られた鬼を使用。

長嘯　（ちょうしょう）
楽器や声で音を鳴らし、生物や自然現象に力を借りる。

風水・卜占　（ふうすい・ぼくせん）
周囲の気の流れを読み、空間や時間を把握。
空間弄って剣の斬撃だけ飛ばしたり出来る。

禁呪　（きんじゅ）
特定の行為を禁じて出来なくさせたり、
物体などを禁じて世界から消してしまうようなことが出来る。

巫蠱　（ふこ）
丹薬（たんやく）という超自然的な効果を持つミラクル薬を調合したり、
特殊能力を持つ動物を基にした使役獣（しえきじゅう）を作り出したりする。
回復役なので自分が倒れないことを前提に動く。

厭魅・厭勝　（えんみ・えんしょう）
相手に似せた人形を使って禍や福を与えたり、紙を切って兵に
出来たりする。

術行使値

仙術（魔法）を使った時のレベルのようなもの。正式名称は仙術行使値。

術会得年齢

仙人として目覚めた歳。

ある特定の条件（６面ダイス２個で１ゾロを振る）で０歳になる。

その場合は前世が少し特殊っぽく出来る。

大抵は特に設定されないがキャンペーンをすると前世からの因縁とかつけられることがある。

2

真面目に考えれば考えるほど落ち込んでくるが、落ち込む気持ちを無理にでも前向きにしなければ思い悩んだところで物事は好転はしない。
この身体が李華嵐であると仮定するのであれば雄大な自然を感じさせるこの風景は央華なのかもしれない。
自宅に居る私と何らかの理由で此処に居た李華嵐の精神が入れ替わり、記憶と知識も色々と混ざったとか？
そう想像すると気持ちが良いものではないが私の知識にない何かがあってもしょうがないと諦めがつくだろう。

「やっ、諦めたらダメじゃん」

前向きにしようと考えていたはずなのに、すぐさま後ろ向きな考え方をする自分に突っ込む。
少々、物事を悪い方に考えることは問題かもしれない。これからの私に必要なことは思考よりも行動だ。
私は現在、実際に居たら世の中を舐めてるのか？っと聞きたくなるようなチート仙人なのだ。
怪我や病気を瞬く間に治し、紙で作った兵士を操り、空間と時間の理を変え、時には敵の行動を止めたりと……
若気の塊、黒歴史更新中という李華嵐に私は今なっているのだからその辺の妖怪など怖くもなんとも無い。
もちろん自分が何が出来るか全てを知らない状態では駄目なので能力の確認をしていこう。
一先ずは袖に入っていた物は袖の中に入れ、取り出せるかを確かめる。
何処に何が入っているのか大体の位置や取り出し方のコツを掴んだ

ところで現状の私の居場所を探索する。
本来だったら探索の方が先かもしれないが自分自身が不明瞭という大変な事態になっているのだから仕方がない。
周辺を探ってみると広葉樹と思われる樹と幾つかの野草、キノコなどを発見出来たがよく解らない。
これはどういうことだろうか？丹と呼ぶ薬を調合する巫蠱の仙人なのだから詳しいはずなんだけど。
……そういえば華嵐は木行も使えたはずだ。
前世に木行の力を固めた玉を魂に移植されて死んだという設定がキャンペーン中で出てきたのだ。
その時に翼のＰＣも術会得年齢が０歳ということで火行の力が込められた玉を移植されたという設定がされていたが
他の面々もそれぞれ五遁の土、金、水の玉に適応力があったということで１０の行使値を手に入れていた記憶がある。
翼のＰＣは元々の火行行使値に１０足して、その時にはかなり脅威となった１７という行使値で敵を倒していた。
あれで余計にゲームバランスが崩壊して後々のＧＭが難しくなったんだよね。
それでもキャンペーンを続行したのは若さだったのか何だったのか。
たぶん、楽しかっただけか。

「思い出すのは後々、まずは確認っと『木行に命じて木を知る、教えよ』」

木とか言いながらも生えてる野草を調べてみるが問題なく木行は使えた。
さて、もしかしたら食べられるものかもって淡い期待を抱いていたわけですが、
便秘に効く成分が入ったベルルーナという名の草で煎じることで効果は高まるらしいと判った。

もう一つ判ったのは央華で聞いたことはない草だし、私も認識したことは無い草で
あと、かなりポピュラーな植物だということも認識出来たりした。
知識として持っていないことを理解出来るのがよくわからないが、
判らないよりはよいので儲けたとでも思っておく。
他の植物にも先程の術を試していく、広葉樹のような木はリガド。
此方もポピュラーな植物でかなり堅く家具としてだけでなく武器や
防具にも使用できるほどだとか。
キノコはピシビラウムという名で麻痺効果があるが香りが甘いので
罠のエサに混ぜたりもするらしい。
私が使った木行の術が確かなものであるとするのならばこの世界は
私の元の世界でもなく央華の世界でもない。
いや、私の知識に無いだけで私の世界にある植物かもっていう淡い
期待は捨てていないが、
１０種類近くの植物を調べたのに知っているものがない時点で可能
性は低い。

「……あはははは」

思わず口から乾いた笑いが漏れた。

「何処よ？ここ」

何やら生存率が下がった気がすることに肩を落としつつも鑑定の結
果、食べられると判ったキノコを手に取る。
生食でも食べられないわけでもないらしいので非常食として持って
行くことにした。
私の身体が本当に李華嵐で仙人仕様になっているのなら飲み食いの
必要はないはずなんだけど
まだ今の自分になって半日も経っていないだろうからよく解らない

のでいざという時のために食料は必要だ。
左手にキノコ、エーノを握り締めて植物を探したことでこの土地が微かに傾斜していることに気づいた私は下へと降りていく。
上に行くよりは下に行った方が何とかなるだろうという。きっと、たぶん……そうじゃないと私が困る。

体感時間で2時間ほど歩いた頃だろうか。私の耳が風で擦れる葉の音や獣の足音とは違う音を捉えたる。
それはずっと聞こえてくるので音の方へと近づけばその音が流れる水の音だということに気付いた。
川でも流れているのだろうと思い立ち小走りで水音が聞こえる方へと近づくが、何者化かの気配を感じて立ち止まる。
ただの一般人が気配なんぞ感じることなどないが今の私は李華嵐なので感覚は優れているはず。
こればかりは憑依したのが術主体の李華嵐であったことに感謝する。
見知らぬ場所では感知能力は重要だ。

「……」

風下から川辺の気配を窺い見えたのは一人の男性。
胸当て（色合いから金属ではなく皮を材料としていると推測できる）をした男は
がっしりとした体型で数日は剃っていないのか無精ひげがはえているのも確認できた。
そのファンタジーな映画で見かけるような服装は
私の世界では最早廃れたものだろうし、央華の世界観ともズレている。

「華嵐様っ！」

第三の世界に居る説が有力となったことに顔を顰めたところで、
鈴の音のように心地よく響く声が背後から聞こえ、驚きで身体が跳ねた。
聞き覚えの無いはずなのに何故か聞き覚えのある声に振り返れば地を這って近づいてくる小さな白蛇。
普段の私であれば蛇が近づいてくれば毒が無くともためらうはずなのにそのような気持ちにはならない。

「鈴華（りんか）？」
「はい」

這うのを止めて鎌首をもたげる白蛇の口から赤く細い舌が出入りしたのが見える。
木漏れ日の下、日の光が当たった部分の鱗が煌めく様はかなりの美蛇だ。
華嵐の使役獣、幸運をもたらす白蛇の鈴華。
セッション時には術者との感覚器官を借りれるため斥候を務め、
バトル時には巨大化し戦い時には回復役までこなすバランスブレイカーその2。
その1は同じ使役獣の白狼の狼嵐（ろうらん）、能力はそのまま讙（かん）という陰気を感知する使役獣だ。
彼も巨大化して戦闘をすると強力だったのでキャンペーン後半は人語を話させたり、
走る速度上げたりと戦闘とは違う方へと能力を付与していった。
逆に考えると使役獣を万能型に育てたとも言えるかもしれない。
あとは藍嵐（らんらん）と名付けた奇余（きよ）という鳥の使役獣も居たが、
彼女は空からの偵察係と乗騎で戦闘には関与しなかったので特に問題はなかった。

巫蠱の仙人をする醍醐味は使役獣だと思うけどゲームバランスが難しくなるのが問題なんだよね。
それを知らずに最初のセッション時に回復役が居ないからっと気軽に作った自分は少し馬鹿だったと思う。
参加者に苦労させられるならともかく、自分自身のＰＣに苦労したわけだし。

「あのぅ華嵐様？」
「えっ！あっ……ごめん鈴華。無視して」
「いえ、私(わたくし)はよろしいのですが……」

鈴華の視線が私の背後を見ているのに気付き、後ろを振り返るとこちらへと近づいてきている男の姿。
迷い無く歩く様子から彼はこういったところを歩き慣れているのだろうが、
油断無く周囲を警戒している様子なので私達を認識してこちらに向かっている訳ではないようだ。

「鈴華、袖へ」

彼女の前に手を差し出せば慣れた様子で腕を伝って袖の中へ隠れる。
二の腕のところに巻きついているので持ち物を出そうとした時に掴んだりしないのは安心だ。
考えてるなっと感心するが、それはそこそこにして近づいてくる男から身を隠すために身を伏せた。

3（前書き）

異世界の言葉をしばらくは『　』表記で表します。

3

男からは木の陰になるように匍匐前身で移動し身を潜め近づいてくる男への警戒を怠らないように気をつけながら男を観察する。
黒髪、全体的に短めの髪は風が吹いても目に入ることは無いだろう
瞳の色はここからの確認は無理っぽい。
がっしりとしたという印象は変わらず、大柄で表に出ている肌の部分は日に焼けており顔の輪郭はやや四角な感じで顔立ちも彫りは深そうだ。
先程、推測したように男は皮製だろう胸当てを付けており、その下には分厚い布製の服に頑丈そうだが草臥れている革靴。
手には弓、背に矢が入った筒、腰には剣と思しき物まで帯びていたが何より私が一番気になるのは男自身だ。
傾斜があることから山と推測できるこの場に狩人が居ることはおかしくは無いがその動きが精練され過ぎているように感じる。

「どうして禁感帯(きんかんたい)をご使用になられませんの？」

男に集中していた私だが小さな声に意識を胸元に向ける。
何時の間にか移動していた鈴華が胸元の衣の隙間から顔を覗かせていた。
円らな瞳で見つめてくる白蛇の視線に私はその言葉を内心で反復する。
キンカンタイという言葉に聞き覚えがあるがそれが何だったのか覚えていないのだ。

「またお忘れになりましたのね。今、お絞めになっている帯のことです」
「あぁ」

禁感帯のことを思い出して、私は納得の言葉をあげる。
簡単に言えば某青いネコ型ロボットの未来道具の一つの石ころぼうしの効果だ。
そこに居てもその存在を認識できなければただの道端の石ころと変わらないのだ。
仲間全員がこれを着用していると問答無用の不意打ち攻撃が出来るのですごい代物だけど、
当初の目的としては敵方への侵入の時のために入手したものだ。
ただ斥候を使役獣達に任せてばかりだったので使用した記憶が2回ぐらいしかない。

「確か使用するには口訣が必要なはずだったよね」

禁感帯の口訣は何だったかと思い出そうと男から意識を逸らしたのが悪かったのか
それとも鈴華に話しかけたりしたのが悪かったのかは判らないが男と私の目があった。
その瞳の色が碧眼だと確かめることが出来たけれど発見されてまで確かめたいことではなかった。
男の様子が何処と無く訝しげなのでまだ発見されてないのかもっと淡い期待を抱き、木の根元に身を縮める。

『そこに誰か居るのか？』

男のものと思われる声が聞こえた。内容は意味不明だ。
ただ抑揚ある声の調子から何らかの言語を使用していると思われるが、
私が喋れる日本語でも多少の聞き覚えのある英語でもなく、華嵐が知る言語でもなかった。

覚えれば発音自体は出来そうではあるが現状では彼の言葉は理解できない。
情報収集をしようにも言葉が解らなければ難しい。

『居るのなら出て来てくれ、こちらに傷つける気は無い』

また男の声が聞こえるが徐々にだが近づいているような気がする。
彼の声は落ち着いているように聞こえるがこの様子からするとこちらを確認しないと気がすまないのかもしれない。
李華嵐としての能力がどれだけこの世界で通じるだろう。この瞬間に逃げ出したら男から逃げることが出来る？
不安渦巻く心中を持て余しながら逃げることも出来ずにそのまま身を縮めている私の耳に男が踏む葉の音が近づいてくるのが聞こえる。

『どうした坊主？』

男の声が間近で聞こえる。見つかったのかと顔を上げれば男が私を見下ろしていた。
思ったよりも近いその位置に驚いて身を固めていると男がしゃがみ。

『親と逸れたのか？』

至近距離で見た男は大柄な割には威圧感が無かった。
それは男がこちらを心配そうもしくは困っているようにも見える表情でこちらを見ているからだ。
これでこの男が私を売っぱらおうとか脳内で考えているとしたら私は人間不信に陥るだろう。
そう考えるほどに私はこの男から危害が加えられるような気がしないのだ。

「すみませんが貴方の言っていることがわかりません」
『あー、言葉が通じないのか？』
「やっぱり通じない」

私の言葉が覚えのあるものなら男は切り替えたはずだが、
そういった様子が無いので少なくともこの男は私の言葉を理解できないのだ。
言語を意識したことで私が先程から口に出しているのが日本語ではなく中国語に限り無く似た央華の言葉であるのがわかった。
この様子からすると日本語も通じない気がするが試したほうが良いだろうか？

「わわっ！ちょっ！ちょっと放してっ！」

男にいきなり抱え上げられた。

『こら、暴れるな！落とすだろう』

放してもらおうと身体をジタバタさせて暴れるが男は放そうとしない。

『落ち着け、大丈夫だ』

私が暴れたせいか弓を落としたがそれを気にした様子なく私を抱っこした。
人攫いだとか悲鳴を上げる気はないが良い歳をした女が抱っことか勘弁なんですけど！身体は7歳でも心はうら若い乙女なんだってばっ！
心の中でそういった様々な言葉が渦巻いたけれど私の背を一定のリズムで軽く叩く男の大きな手に段々と暴れる気力を失くしていく。

大人しくなった私に安心したのか男が笑ったことに気付いた。草の香り、土埃に汗の匂いとお世辞にも男は綺麗とは言い難いが何だが安心する。

「……」

思わず毀れた一滴の涙を男には気付かれたくなくて私は目を瞑り男の肩に顔をグリグリと押し付ける。
私の行動に男はどう思ったのか背を叩いていた手が私の頭を撫でる。
その節くれだって荒れた手が何だか酷く優しい気がして、また涙が出そうになったので涙が出ないように私は強く目を閉じる。

今、私は見知らぬ男に抱えられたまま運ばれている。
こちらに危害を加える気は今のところはなさそうだと私は判断をすると
しばらくは男の行動を容認しようと大人しく男に抱っこされるのも我慢することにした。
男が歩くたびに僅かに揺れるが歩くよりは文句なく楽だし。
落ち着いた私を抱えたまま落とした弓を拾った男は私に声をかけながら周囲を探索したが、
その様子が何かを探すような感じからして子どもである私の連れを探していたのかもしれない。
私が気付いた場所とはここは離れているので当たり前だが何も発見することなく男はその探索を止めるとその場を離れ始めた。
彼の足取りが迷いがないことからすると目的とする場所はあるようだし、見知らぬ子どもを森で拾ったにしては男は落ち着いている。

何らかの負の感情、苛立ちといったものはあるようだがそれを私にみせない様にしているようなのはポイントが高い。

「３０代半ばぐらい？」

私を抱える髭面をした男の顔を近くから観察する。
この世界でも私の世界と同じような人種がいるのかは判らないが、黄色人種である私、李華嵐も中国に似た世界の住人なので黄色人種なはずだ。
そして男は白人種に見えるので年齢といったものが推測し辛い。

『あと少しで着く』

私の発した言葉に何と思ったのかは知らないが男が私に優しく語り掛ける。
こちらを気遣ってくれているのだと思うけれど不躾に年齢推測をしていた私からすると居た堪れないので下を向き視線を下げることで男から逸らす。
しかし、この男は左腕に子ども１人を抱えて１時間程度は歩いているはずなのに疲れをみせない。
私は華嵐を小柄と設定はしたものの体重２０キログラムはあるはず、この世界の人間は肉体が頑丈とか体力があるとかだろうか？

『どうした？』

彼が何を言っているのか解らない。
その不便さに顔を顰めてしまうが下を見ている私の表情は男からは見えないだろう。

『眠くなったのか？』

男は言葉が解らないと理解していながら私に話しかける。
無駄ではないだろうかとも思うが男の声を聞いているのは悪くない。
一定のリズムに揺られながら、聞こえてくる男の声に段々と眠くなってくる。
異常事態というのにその眠気は抗い難くなっていく。

『眠くなったのなら寝ていいんだぞ』

もしかしてこの声に睡眠効果でも付与されているのではないだろうか？
私はそんなくだらないことを思い浮かべた後に迫りくる睡魔に身を任せた。

4

眠りから目覚めると見覚えのない木の天井が見えた。
一瞬、自室とは違うことに驚いたがすぐに夢であってほしいようなことが思い出されたので
飛び起きるまではしなかったが目が覚めると違う場所という展開はそろそろ止めてほしい。
そういったものは主人公属性持ちの人間にしてあげてほしいものだ。
私はＴＲＰＧでちょっぴり非日常を味わった気分になるだけで充分な人間なのだ。リアル非日常はお呼びではない。
だというのに今の私はどっぷりと訳が解らない非日常に紛れ込んでしまっているとため息をついた。

「華嵐様、お目覚めになられましたの？」

私のため息に気付いたのだろう鈴華が枕元からその身をくねらせて現れる。
狭い隙間なので潜ってでもいたのだろうか。

「おはよう」
「はい、おはようございます」
「あれからどうなったの？」

朝の挨拶をすれば清々しく挨拶を返してくれた彼女は私の顔の横へと移動すると止まった。

「あれからほど無くしてここに運ばれました。男性の住居のようです」

現状のことを尋ねれば男性に此処に連れてこられたのだと知る。
ただベットの上に寝かされているのだから彼は本当に親切な人なのだろう。

「彼は？」
「今お目覚めになられるまで華嵐様は丸一日眠っておいででしたので、
先程、男性が様子を見に来られた後に慌てて外へと出て行かれましたが……
もしかしたら医者でも呼びに行かれたのやもしれません」
男性の姿は見えないだからこそ彼女は話しかけてきたとは思うけど。
彼が何処にいるのか尋ねてみれば、それとは別に疑問に思うことが出てきた。

「丸一日も寝てたの？」

丸一日も寝たにしては身体に異常は感じられないし、逆に調子が良いぐらいだ。

「丹の効果が切れたのでしょうから仕方がありませんでしょう」
「丹？」
「はい、無眠丹（むみんたん）をお飲みになられたではありませんか」

央華封神では仙人といえど睡眠を必要とする。
眠らなければ判定にペナルティが起きるがそれを起させないようにするのが無眠丹だ。
４日連続の使用は出来ないがボス戦前などに飲んでお薬を何度か自作したことがある。
もしかしたら今回もこの身体の持ち主である李華嵐はそうしたのか

もしれない。
そして、効果時間である1日が経過して眠りについたのだとすると辻褄は合う。

「あのさ」

彼女は李華嵐を知っている。
きっと、こうなる前のこの身体と行動を共にしていたはず。
使役獣は生み出した巫蠱の仙人にとっては子どものようなもので、李華嵐もそう考え、その使役獣達も親のように慕っているはずだ。
そんな彼女に私はこの身体の精神は違う人間だと告げなければならない。
酷く胸が痛むが黙っていることのほうが辛いと感じるのだから仕方がない。
……これは李華嵐としての痛みなのかもしれない。我が子を騙したくないと思う彼女の痛み。

「どうかされ……あら、あの方がお戻りになられたみたいです」

鈴華の言葉に複数の人の気配が近づいてくるのに気付く。
数値しては彼女よりも華嵐のほうが上のはずだが、悩んでいたために鈴華のほうが先に気付いたらしい。
ＴＲＰＧとは違ってやはり純粋に数値での問題ではないのだろう。

「華嵐様、私は隠れておりますね」
「うん」

彼女にこちらの事情を説明するのは後にしよう。
事情が事情だ。慌しく説明をするようなものではない。
ドアが開く音の後には慌しく入ってくる人の気配。

足音は二人分だが気配はそれよりも多い気がすると疑問に思っているとドアが勢いよく開いた。
驚いたものの視線をそちらへと向ければ布の固まりかと思うような老婆を背負った男が見えた。

『起きとるではないか！』

老婆は私を見るや自分を背負う男の頭を叩いた。
枯れ葉のように細い腕ではあるので男の頭より彼女の腕の骨が折れないかが心配だ。

『お婆様（ばばさま）、俺が見た時は起きていなかった』
『フンッ、ただ寝ているのを心配しおって』
『ジョナお婆ちゃん、そう言ってないで診察はしましょう？折角、来たわけですし』

聞き覚えのある男の声と年老いた女と思われる声に若い女の声。
足音が二人分なのは男が老婆を背負っていたからのようだが、
何やら男が怒られているような気もするのは気のせいだろうか。

『そうするかの』

男は部屋に入ると老婆を降ろした。
腰は曲がっているようだが意外なほどしっかりと立っているので歩けないから背負っていたのではなく速度を優先したのかもしれない。
その後から入ってきたのは栗色の髪を括った可愛らしい２０歳ぐらいの女の子が入ってきた。
彼女は私と目が合うと微笑みを浮かべたのでこちらを怖がらせる意図はないようだ。
老婆の方はよくわからない。近づいてきて私の方を見たと思ったら

動きが止まったのである。
無言で見つめてくる真顔のお婆さん、マジで勘弁してほしい。怖い。
私はまさに蛇に睨まれた蛙のように動きを止めて老婆の反応を窺う。

『こやつ、人間かのぅ？』

老婆の一言で部屋の空気が変わった。
確かに感じたその変質に私は戸惑ってここに連れてきたのだろう男へと視線を向ける。
その男の瞳にも困惑の色があり、このお婆さんは意外なことを言ったようだと推測できたが、
それだけでどうすればいいのかの判断はつかず私はベットの上でただ彼らを見ていた。

『どういう意味だ？』

男の声は何だかざらついていて目覚める前に聞いた声よりも低い。

『何じゃ、その顔は？心配せんでも悪いモノとは言っておらん』
『よかった』

息を吐いた女の子の様子から最悪な感じはしない。

『この子どもは精霊のようなものかもしれんっと思っただけじゃ』
『精霊は姿が見えないはずだ』
『力の強い精霊は姿を現すことも可能じゃぞ』
『だが、そんな精霊だったら言葉を理解してるんじゃないのか？』

何を言っているのかはわからないが男は老婆の言葉に納得がいかないらしい。

二人の早口に近いその会話に女の子は視線を二人へと彷徨わせている。
彼女もまた私と同様にこの会話についていけていないのかもしれない。

『理解しておらんのか？』

二人が会話をしていると思ったら同時にこちらを見つめてくる。
女の子もまたその中に加わっており、私は三人の視線に身体がビクついた。

『もしかしたら若い精霊かもしれんが、別の可能性とすれば落し子（おとご）やもしれん』
『落し子って昔話に出てくる？』

唸るような声を発した老婆がまた何かを言ったと思えば今度は女の子が口を開いた。
ついていけていない訳ではなさそうだ。

『そうじゃ、何処かにあるということは違う遠い世界から零れ落ちた者じゃ。
それならば尋常ではない光を内包していてもおかしくはなかろう』
『光？』

男が短く何かを呟いた。

『うむ、下手な光の精霊よりも持ち合わせておる』

そして、やはり三人の視線は私の方へ。
……お願いですからチラチラとこちらを見ながらの会話はご遠慮い

ただけませんか？
負の感情ではなくとも理解できない言葉で何かを言われているのは精神力をガリガリッと削るんです。
心の中で敬語でそうお願いしてみるがもちろん通じはしない。
その視線に負けた私は毛布を引っ張り潜り込むことにする。
多少の声は聞こえるかもしれないがそれより視線を緩和できれば良い。
見た目だけとはいえ、いたいけな幼女を苛めないで頂きたい。

5

不貞寝を決め込もうと毛布の中で目を閉じていると毛布が捲られた。
誰が捲ったのかと目を開ければ白く濁った目とかち合う。
私について何かを言っていたらしい彼女は年齢からきたのだろう白内障に左目がなっているようだが右目は綺麗な薄い茶色の瞳だ。

『何やら賢そうな顔をしてるじゃないか。その顔の通りに大人しくしてるんだよ』

皺の多い手が私の頬に触れたと思えば喉に触れる。
その行動を訝しげに見つめていると彼女は纏った布の中に手を入れて直径1センチほどの丸い玉を私の口に入れた。
何か解らないものを口に入れるのは危険かもしれないが万が一の時でも鈴華がいれば大丈夫なはずだ。

「甘い」

口に入れられたのは甘い飴玉だ。薬とかそういう感じではないが何故に飴玉なのか。
でも、この飴玉はかなり美味しい。円やかなこの甘さは一体なんだろう。

『顔色も悪くないし、怪我らしい怪我もしてないようだ。
それにリートゥの花の蜜玉をあげたんだ栄養も大丈夫だろうさ』
『わぁ、蜜玉が好きみたい。すっごく嬉しそう』

私のほうではなく男性の方へ彼女達は喋りかけているので毛布を被り直すのは

一先ず止めておいて3人の方へと視線を向けると何やら暗い顔をした男と目が合った。
何やらしょんぼりとしているような感じなのが心配だ。

『お婆様、俺があの子を引き取ろうと思う』
『独り身の男がかい？』

何やら真剣な様子で彼は二人に何かを告げている。
それを告げられた二人の反応が少し驚いているようだった。

『独り身だが俺には多少の学もあるし、身を守る術は教えてやれる。
あの子を立派な男に育ててやりたい』
『そりゃあ、無理だねぇ』

何だか老婆の言葉はいつも男と女の子を落ち着かなくさせるようだ。
年は老いてはいるが彼女のきびきびとした態度からして
自分の意見を言っているのだろうがそれが若い二人には受け入れられないとか？

『それは俺に親たる資格がないと？』
『ロバートさんなら立派に子どもを育てることが出来るわよ』
『……立派に育てられるかどうかは育ててみなきゃわからないが、
女の子を男に育てあげるのは間違ってるんじゃないかねぇ』
『えっ！』
『あの子は女の子なのかっ！』

こっちを急に見るなっ！
油断していたら二人からの視線が急に向けられた。
特に男の方のその信じられないものを見てしまったと言わんばかりの表情は何だ？

私自身に何か文句があるのなら、私の解る言葉で言え。

『あぁ、そうだよ』
『でも、ジョナお婆ちゃん。あの子の髪は短いわ』
『ここらの子じゃないんだから髪ぐらい切るんじゃないかい？』
『……でも』
『髪ぐらいすぐに伸びるだろうからあまり気にすることはないだろうさ』

老婆が年の功で話をまとめた様だ。
きっぱりと言い切った彼女の言葉に納得したように女の子が頷いている。

『お婆様』

その背に声をかけた男の声は不安そうだった。一体全体どのような話し合いがされたのだろう。
私の方を見ていたので私についてだと思われるが、孤児院に預ける話でもしていたとか？
それで女の子は同情して抗議の声を……いやいや、親切な人だとしても見知らぬ子どもを引き取る可能性は低い。
これが子どものいない老夫婦だったとかなら可能性があっただろうけど。

『好きにしな、ロブ。あんたはいつもそうだっただろ？』
『待って、ジョナお婆ちゃん。あっ！ロバートさん、後からあの子が着れるような服を持ってきますねっ！』
『すまない。サラ、よろしく頼むよ。お婆様もここまで来てくれてありがとう』

老婆は話は終わったとでも言うように部屋から出て行こうとしていた。
そしてそれを追うように女の子がその背に続いていくが男はそれにはついて行かずに部屋に残っている。
会った時よりも何やら小奇麗になっている無精髭はそのままだが全体的な汚れは落ちているし服が変わっていた。
彼は山でやはり狩りか何かを行っていたから汚れていたのだろう。

『女の子だったんだな。お前』

かなりしょんぼりとしている男。もしかしてあの老婆に叱られでもしたのだろうか？
何でも拾ってきたりしてはいけませんとか。私は猫でも犬でもないけどね。

『それに名前も聞いてなかったな。寝ている時に何て呼べばいいのかわからなかった』
「すみませんが何を言っているのかわからないんです。
まぁ、その何があったのかはわかりませんがあまり落ち込まないほうがいいですよ」

話しかけてくる男に私の言葉は解らないだろうが話し返すと男の顔に笑みが浮かぶ。

『お前も何かを話そうとはしてくれるんだよなぁ……あのな、俺がこれからお前の父親代わりになるつもりだ。
此処のことを知らないお前にどれだけのことを教えてやれるかはわからないが、
俺はお前がここで生きていけるだけの力を身に付けさせてやる。
親としては不甲斐無いだろうがこれからよろしく頼む。

こんな決意を語ってすまない。お前がわからなくても言葉にすることで俺の誓いにしたかったんだ』

彼は私が居るベットに近づくと私にいつもより長く語りかける。その言葉の中で同じ単語があったが、『お前』とはどのような意味だろう。

『さて、お互いに名前を知らないとな。俺のことはロバートと……いや、それだと他人行儀か。

さすがにお父さんやパパだとかは早いだろうし、でもこれぐらいの子は最初からそう呼ばせたほうがいいのか？

パパなら小さい子が父親を呼ぶ時の言葉だ呼びやすいんだろうな。

よし、俺のことはパパと呼ぶんだ。パパ、パパだ』

彼が同じような単語を口に出しながら自分を指差している。『お前』とは違って連続して言ったことからして彼の名前を示しているのかもしれない。

「『パパ』？」

彼が言っている言葉を自分の口から音として発してみたが、合っているのか不安になって小首を傾げながら言ってしまった。大人だとしたらナカナカどうかと思う姿だが今は幼女なので本来の私と違って可愛いはずだ。我慢してほしい。

合っていたのか彼、いや『パパ』さんは私の言葉に破顔一笑して頷いてくれた。

そこまで喜ぶとは私はどれだけ彼の中で子どもだと思われているのだろうか。

7歳児設定のはずだが4歳児とかでも彼には思われているのかもしれない。

「えーと、私は華嵐です。か、ら、ん。からん」

漢字で書くと少々面倒な字ですが口語には関係ないし、そもそもきっとこの世界は漢字はないだろう。

もし在ったとしたら何らかの交流か、似通った文明があったのだろうからそれはそれで興味深い。

『カラン』

ほんの少しばかり発音に違和感があるが頷く。

「はい」

華嵐それが今の私だ。戸惑うことなく名乗れる名前。

……李華嵐、貴女から名と身体を借りるよ。

いつ返せるのかもわからないし、返せるのかすらもわからないけれど仙として生きた貴女から多くを借りるのだから私はここに華を咲かせよう。

私が知る李華嵐は世界の全てではなくその手に届く者を救うことを心情としている。

それが彼女の生き方、彼女の願い。だから華嵐を種とする私は彼女の願うように咲くことにしよう。

私の手が届く範囲で私は誰かを救おう。それが傲慢だとしてもそれが李華嵐なのだから……――

6

自己紹介を終えた後、『パパ』さんが食事を用意してくれた。
食事を取ってないとでも思われたのかそれはお粥だった。
お粥といっても米で作られたものではなく、材料は麦に似た植物だ。
私の世界でも麦粥はあったのだしこの辺りでよく食べられる物なのだろう。
味付けは現代人の私の舌で考えると薄いが充分に美味しい。
でも、これにちょっぴり塩味を加えればもっと美味しいだろう。
そのことを残念に思うが見知らぬ子どもに食事まで与えてくれる男性の心遣いに食事を終えた後に礼を言う。

「ありがとう『パパ』」
『美味しかったか？カラン、もう一杯いるか？』

笑顔で言ったのだからきっと解ってくれたと思いたい。
麦粥が入っていた木の皿を受け取った彼は私の頭を撫でる。
彼がジェスチャーで皿に何かを掬い入れるような動作をした。
これはお代わりがいるかときいているのだろうとお代わりを断るために首を振ろうとして動きを止める。
ここが日本と同じ動作で大丈夫だとは限らない。
確かどこかの国では首を振るがイエスになるとテレビで見たことがある。
なので、自分の手でお腹の上で山を描くように動かす。
満腹という意味だが解ってもらえただろうか？

『お腹一杯っか？小食だな……いや、小さい女の子ならこれぐらいか』

男性の様子からしてお代わりを持ってこようとしないので解ってもらえたみたいだ。
食べられないわけでは決してないけど、丸1日を寝て過ごしたはずのこの身体に空腹感はなかった。
この身体は普通の人とは違い何も食べなくても大丈夫なのだろう。
必要ない時点で物を食べるという行為はただの道楽でしかなく、生活の糧を必要のない者が食べるのは問題かもしれないが、ただの子どもであるのなら何も食べないのも疑問に思われそうだと食べたのだ。
けれど、物を食べるという行為が好ましいらしく私はしっかりと味わって食べてしまった。
李華嵐の趣味は料理だし、仙人として選んだ戒律(かいりつ)の中に食事を楽しむようなことを選んだのだから当然か。
仙人は戒律にしたがい生きている。それは人の世の決めごとではなく、仙としての生き方だ。
洞統五戒(どうとうごかい)の中から選んだ戒律に矛盾したものはないはずだけれど、いつもの私と違うところを思い出しておかないと戒律を破ってしまう……いや、そもそも戒律が今の私に影響を与えているようだから、ひどい戒律破りは心情的に出来ないのかもしれない。
思考に沈む私の耳に何かを叩く音が届いたので考えるのを中断する。

『サラが来てくれたのか』

木の皿を持って彼は部屋を出て行く。先程の音はたぶんノックだったのだろう。
来客に対応すべく向かったのだろうと推測し、麦粥を食べるために起していた身体を横たえようとした身体を止める。
彼が戻ってきたらまた身を起そうと考えていたけれど人の気配と声が近づいてくるのに気付いたのだ。
来客は先程の女の子だったようだが、どうかしたのだろうかと中途

半端な態勢で部屋の外をうかがっているとノックの後に部屋のドアが開いた。

『カランちゃん、着る物を持ってきたよ』

ドアを開けたのは家主である男性だったが入ってきたのは両手一杯に様々な衣服と思われる布を抱えた女の子だった。
それだけでなく左脇に彼女は板状の何かを挟んでおりっと一度に運ぶ量として少々多いし運び方に問題がある。
この様子からして彼女は神経質どころか大雑把と括るに相応しい性質の持ち主だろう。

『あたしの小さい頃の服だから気に入らないかもしれないけど我慢して着てね』

ベットの上、私の足元の方は充分に使っていないスペースがあったのでそこに彼女は衣類を置き。

『それと青板も持ってきたの。これは絵を描いたり出来るんだ。
もう少し大きくなったら字を習う時にも使えるの』

笑顔で紺色の板状の物を両手に手に取ると私に見せ、スカートのポケットから白っぽい石と布切れを取り出すと
紺色の板にたぶん花の様なものを描いたかと思えば布切れで消してしまう。

『はい、どうぞ』

差し出された紺色の板。これは色は違えど黒板だ。
彼女はどういうつもりでこれを差し出しているのかを推測する限り

は暇つぶしに絵でも描くようにということだろう。
だけど、これは私にとっては素晴らしい贈り物だ。

「ありがとう」
『どう致しまして』

貸してくれただけかもしれないがそれでも私の目的は達することは出来るはずだ。
差し出された黒板と石を彼女から受け取って礼を言う。
そしてすぐに私は黒板に石を滑らせる。
大きな丸、続いて上に四角を重なるように描き三角は左側に重なるように描いた。
その後に幾つかの線やら何やらを描くと見事によくわからない何かが黒板に描かれた。

「はい」

にっこりと笑って私はその黒板に描かれた物を彼女に見せる。
そうすると彼女は笑顔でその絵を見たが、何やら少し困ったように眉を寄せた。
子どもが描いたこの絵は一体なんだろうかという問題に頭を悩ませているのだろう。

『ロバートさん、これは何だと思います？』

私が持つ絵を覗いていた彼女がドアの前に立っていた彼を振り返って呼んだ。
呼んだとわかったのは彼女の言葉の後に彼がこちらへと近づいてきて黒板を覗き込んだからだ。

『わからない。何だろうな？』
『……何でしょうね？』
１０歳は年が離れているだろう二人で仲良く黒板をのぞき込む様子は少し面白い。
二人の会話をしっかりと耳に入れつつ、何度も出てくる単語を私は思い起こす。
『ねぇ、カランちゃん。これは何かな？』
そして、この彼女の発言に目的のものを見つけたのだと解って笑った。
「これは『何』？それは『何』？」
自分が持つ手の石を見せて問い。
続いて彼女が置いた衣服の一つを指差して問う。
『えっ』
戸惑ったような表情を浮かべる彼女。
もしかしたら選んだ単語は間違いだったのだろうか？
何それ？的な単語だと思ったのだけれど。
『それは石だ。石』
『あっ！これは服だよ。服』
男性の方が私の意図に気付いたようだ。
その後に女の子も解ったようで手近な衣類を取って私に答えてくれた。

私が手に持っているのは『石』、衣服は『服』。
尋ねられるようになったことに私は満足するが大事なことを聞いていない。

「『からん』。あなたは『何』？」
『サラ』
「『サラ』」

自分の胸を叩いた後に私は女の子の名を問う。
聞き方としては無作法かもしれないがそこは許しいほしい。
サラとは可愛い名前だ。私の世界にでも普通にありそうな名前だ。
男性の方はパァノという少し妙に感じる名前だったけど、異世界なのだからそれぐらいは普通か。

「『からん』『サラ』『パパ』『石』『服』」
『パパ？』

サラさんが不思議そうに呟いた。
覚えた名前と単語を口に出してみたが男性の名前を間違えたらしい。

「『ぱぱ』？」

少しばかり発音を変えて言ってみる。
合っているかと問おうかと『パパ』さんを見れば何やら彼は頬を赤くし、サラさんはそんな彼を目を見開いて見つめている。
妙な言葉になったみたいだ。二人は私の言葉で何を連想したんだろう？でも、そもそもパァノという名前がその連想する何かと発音が近いのが問題なのだ。
自分の責任を放棄することに決め、二人がこちらに意識を戻してくれるまで待つことにする。

しかし、妙なことを口走る可能性を考えると早急に言葉を覚えなければいけないだろう。
彼らが答えてくれるかぎりは『何』っと質問攻めにしようと心に決めて布切れで私は黒板の奇妙な図形を消す。

6（後書き）

用語

洞統五戒　（どうとうごかい）
選んだ洞統にある五つの戒律（かいりつ）のこと。仙人は戒律にしたがって生きるのでそれを破ってはならない。
ただ洞統五戒すべてではなくそのうちの３つを選んで自分の戒律とする。
新しい洞統を学ぶたびにその洞統の戒律を１つ増やしていくが、同じ戒律が重複する場合はその戒律は選べない。
また正反対の戒律を選ぶことは出来るが、その状況のたびに戒律を破ることになるので普通は選ばない。

7

大人しく私が待っていると二人は程無くして落ち着いたようだったので、
部屋にある物の名前を聞いていく覚えられないだろうと
黒板に聞きながらカタカナで文字を書いていたけれど、
私のその行動に二人の視線は字を書く私の手を見ていた。

『クローゼット、イス、ベット』

部屋の中の粗方の物の名前を聞いた後、黒板を見ないようにしながら言葉を繰り返していく。
一つ一つ指差しながら教えてもらったように言う。
それほど多くはないが15個ほどあった単語を言い終えて二人を見る。
訂正をされなかったので間違いではないはずだけれど。
反応がない二人を交互に眺めていると『パパ』さんが頷いた。

『大丈夫、あっている』

近づいてきた彼に頭を撫でられた。褒めてくれたのだろうから合っていたようだ。
暗記は苦手ではないがいつもより苦労しないのはこの身体のおかげみたいだ。
驚いたことに認識して覚えようとした単語を忘れないのだ。
能力である知識が高いので色々なことを知っているはずだが、
知識が多いということはその理解力も高いということらしい。
現在の自分の恐ろしいまでのスペックの高さに驚いてしまうが、そういえば李華嵐は裏成功を良くしていたので能力値変動がよくあっ

た。
低下が永続的なものの場合は白蛇の幸運で打ち消していたので能力値はどれも減っていないがよく使う能力値は初期値より上がっており特に知識については人間を越え、仲間内では知識の化物と呼ばれていた。
化物と称されるのはどうかと思ったものの、GMとして説明する時に華嵐が知っていたやら思い出したとかで説明するのが楽なのでそうしていたので否定も出来ない。

『ロバートさんっ！カランちゃんってば天才ですよっ！』
『……そうかもしれないな』
『どうかしたんですか？』

興奮したような声をあげるサラさんと気難しげな『パパ』さん。
二人の反応にやっと自分が不味い行動をしたことに気付いた。
7歳児の子どもがこれほど早く言葉を覚えていく、
ここがどれだけの文化基準かは知らないが現代でも気味悪がられるだろう。
神童、天才児だとか思われるならまだしも悪魔の子とか妙なレッテルを貼られたら堪らない。
普通の子どものふりをしておかなければいけなかった……今更演じたところで妙に思われるかな。

『この子が文字を知っていたということは教育を受けた証。着ている服は上等な物だ。
もしかしたらこの子は貴族とかそういう家柄の子どもかもしれない』
『確かに動作も気品というか子どもらしくないところがありますね。
礼儀作法とかの教育を受けていたのかも……』
『ここの生活に馴れてくれるか心配だ』

『大丈夫ですよっ！カランちゃんはまだ小さい子ですし村の生活に馴れてくれます。
それに、村の皆が家族です。愛情を受けて育った場所が故郷になります』

浮かない顔の彼と何やら明るい感じで喋っている彼女。まだこれなら深刻な問題ではないかな？
もしかして悪魔の子とか思われていたとしても、今までの態度からして行き成り殺すとかはないだろう。
たぶん出会った山に捨てられるだけ、そうなったらなったでショックだろうけど彼らを恨まないようにしよう。

『あと、ロバートさん。その髭は剃らないとダメです。
もう昼も過ぎているんですから身嗜みはきちんとしてて下さい』
『いや、これは』

話の展開が変わったのかビシッとか効果音がつきそうな勢いでサラさんが『パパ』さんを指差した。
彼は口元を手で隠すようにして何かモゴモゴと言っているが、それは間違いだろう。

『今朝はカランちゃんのことが心配だったからしょうがないですけど、
カランちゃんは元気ですし、今は私も居ますから剃ってきて下さい。
その間にカランちゃんには服を着替えてもらいますから』
『あぁ』

サラさんに何かを言われて不承不承といった様子で出ていく彼の背中は煤けているように見える。

こういう時の女性に逆らっても面倒なだけなのだと彼は解っていないのかもしれない。

『もう面倒臭がりなんだから』

ドアが閉まった後にサラさんは何かを言った。
文句でも言ったのだろうか？しかし、それにしては怒っていないような気もする。

『パパがかっこいい方がカランちゃんもいいよね？』

楽しげに笑うサラさんは可愛らしいが何を言ったのかは解らない。
でも、『パパ』さんと私の名前があったのでそう悪いことは言っていないと思う。
彼女はベットの上に置いた衣類を幾つか取り出すと私に合わせる。
全体的に可愛らしい衣装が多いので女の子のものだと思うが
新品という感じではないのでサラさんが昔着ていた物かもしれない。

『これなんかは似合うかな』

楽しそうに彼女は私に衣装を合わせている。
見ず知らずの子どもをこれだけ楽しそうに世話を焼くのだから彼女は世話焼きなところがあるのだと思う。
大人しく彼女に促がされるままに着ている服を脱ぎ、衣類を受け取ろうとして何故だが着せられていた。
子ども扱いはかなり嫌だったが今着ていた服が違う構造の服なので着方がわからないとでも思われたのだろう。
私としては洋服に近い構造だったので着方なら余裕でわかったけど仕方がない。

『髪が伸びたら髪を結ってあげる』

彼女は私の衣服を整えた後に髪を手で梳く。
寝癖などはなかったようでさらさらと髪が零れ落ちる。
長年旅生活だったとは信じられないほどキューテクルな髪だ。
自分では見えないけど天使の輪とか出てるのかも……。
サラさんが満足したように頷いているので良いらしい。
今回のような行動からして此処でも頷くことは肯定の意味なのかもしれない。
そのようなことを考えるとドアがノックされる。

『はい、入っても大丈夫ですよ』

サラさんが返事をするとドアが開く。

「……誰？」

服装からして『パパ』さんだ。だけれど、今は髭はなくて５歳は軽く若く見える。
もしかしたら彼は３０歳を越えていないのかもしれない。
意外と若かった『パパ』さんに衝撃を受けていた私は呆然と彼を見つめていた。

『可愛いでしょう？』

サラさんが私を前に押し出す。

『そうだな。可愛い』

そこそこ良さげな顔立ちは厳しさを感じさせるものなのに、笑顔を

浮かべた瞬間は意外と可愛らしいものになった。
ギャップが世のご婦人方をときめかしそうですね。
そんな7歳児なら思い浮かばないようなことを考えていた私はその後に自分はそれほど歳も離れていない人に保護され、年下の人に着せ替えられていたという事実に思い当たり身もだえすることになる。

7（後書き）

用語

裏成功　（うらせいこう）

央華封神では基本的に判定に6面ダイスを2個使用する。
判定時に低い数値が出た場合はダイスを返して、
その数値を判定の数値として申請することが出来る。
そしてそれで成功した場合が裏成功（失敗はそのまま失敗）となる。
この場合は理を曲げたことになるのでその反動が起きる。
反動時に対応した表を振り、その結果で何かがおきることがある。
能力判定の場合は能力値が下がったり上がったり。
（ゾロ目となる可能性がある目で、ゾロ目の場合は能力値変更が永続なる）
術判定の場合は気の大爆発で術者にも解除不能などが起きる。
もちろん、普通の成功もあるので悪いことばかりではない。

8

この世界に来て3日経ったが私は今も『パパ』さんの家でお世話になっている。
ずっとかは判らないけれど私のことは彼が面倒をみてくれるらしい。
拾った本人が責任を持つということかもしれないが自分の実年齢を考えると微妙だった。
彼が嫌いなわけではないが３０にもなっていない人に２４の大人が保護されてる。
生きるという点では放り出されたところで大丈夫だということに確信しているからこその感情だろう。
もちろん感謝はしているのだけれど、一つ問題がある。
この家にはベットが一つしかないので夜中は『パパ』さんと一緒に寝ているからだ。
彼は保護している子どもが寂しくないように気を使っているのだろうと思う。
その証拠はこちらが眠るまでは彼が眠らないことだ。悪気がないどころか親切心だと思うので無碍には出来ない。
別に今の私は子どもの身体をしているので問題ないのだけれど、私の個人的な感情からは居心地が悪いので勘弁してほしい。
悪い人ではないと思うが会ったばかりの人なので緊張してしまうのだ。これが翼や章吾なら緊張せずに寝れただろう。
今はしないが２０歳ぐらいまではＴＲＰＧ仲間の家、大抵は私か章吾の家だったが、
そこで泊まりのセッションしたりして、眠くなったら適当に雑魚寝とか平気でしてた間柄だ。
最早、お互いの家族に名前と顔を覚えられているという親密ぶりなのだ。
翼のお母さんには、そろそろ結婚も考えときなさいって言われるぐ

らい良くも悪くも遠慮がない。

「……お母さんのご飯食べたい」

本音が漏れてしまう。
元の世界のことを考えないようにしていたが
近くに誰もいない状況に久しぶりになったので弱気になっている。
今は『パパ』さんは道具、たぶん狩猟関係と思われる弓などの手入れをしているので
子どもが近くに居ると危ないと思われたのか私は部屋に一人残されている状況だ。

「華嵐様のお母様のですか？」

鈴華の声を3日久しぶりに聞いた。姿を現したのも3日ぶりだけれど変わりはないようだ。
食事は私と同じく必要ないのだから心配はしていなかったが、やはり無事な姿を見て安心した。
彼女には話さなければいけないことがあったがまだ話してはいない。
ずっと近くに『パパ』さんかサラさんが居たので話す機会がなかったからだが、
彼女に嫌われたり、責められたりするかもしれないと思うと伝えるのをやはり迷う。
だから、私の思わず漏れた弱音を彼女が聞いてくれたのは良い機会なのだろう。

「違うよ」

華嵐の母親ではなく私自身の母親だ。
休みの日に寝ていると口うるさくダラダラするなっと怒る母。

うるさいと思っていた母の姿を思い出して懐かしく思う。
もっと離れた時だってあったというのに情けないほどに両親に会いたかった。
帰れるかわからない状況だからこそ私の胸は締め付けられる。

「華嵐の母ではなく私の母のこと」
「えっ？どういう意味でしょう？」

鈴華にしてみればどちらも華嵐の母になるだろう。
理解できないと見上げてくる彼女に私は今の状況を説明しようと口を開く。

「この身体は李華嵐の身体だけれど、その精神は違うの。
私自身は部屋で意識を失ったと思ったらこの世界で目覚め、
そして何時の間にかこの身体に入ってたことに気付いたの」
「……でも、私と再会できた時に私の名を呼びませんでしたか？」

私の言っていることを理解はしたようだけれど、納得できないようで鈴華が私に問いかけてくる。
こんなことを私も知り合いに言われたら、私だってその人の頭を疑ったことだろう。
ただ幸いなのかは判らないが彼女達は不思議な現象によく巻き込まれるというか、
自分達自身が一般とは違う仙人とそれに関わる存在なので全否定はされない。

「知っていたからよ。たぶんこの身体の持ち主の記憶が私の中にあるの。
思い出すには切っ掛けがなければ難しいけど必要なことは考えるとわかる」

嘘は言っていない。確かに私は彼女を知っていたし、思い出そうとすれば私は李華嵐の記憶を知ることが出来るからだ。

「私は意識を失う前に変なことはしていなかったから原因があるとしたら

この身体の本来の持ち主である李華嵐さんが巻き込まれたことか、もしかしたらこの世界自体にあるんだと思っているんだけど……」

「まさかあの時の術が……」

「心当たりがあるの？」

どちらに可能性があるかと思っていたと言えば李華嵐の方だった。仙人としての実力が上がっていた李華嵐達が動いている事件であればその敵もまた相当の実力を持つはずだからだ。

下手をすると世界の根底を揺るがしかねないほどの力を持っている可能性もある。

「私がこちらに飛ばされる前は戦っていたのです。

風水・卜占と禁呪の術を使う恐ろしいまでの腕を持つ陰仙で……

華嵐様と私はその者の独自の仙術を受けてしまい気付いたらこちらに。

……貴女様には本当に申し訳ないことをいたしました」

「へっ？」

鈴華がうなだれる様にその頭を下げた。

謝られるとは思っていなかった私は間抜けな声を出してしまったがどうして謝られるか本当に解らないのだから仕方がないと思う。

「どうして謝るの？」

「どうして？何故なら貴女様は私達の事情に巻き込まれただけなの

です。
本来、彼の者の術は止めねばならなかった術でありその為の準備も私達はしていた。
だというのに私達はその術を止めきることが出来ず術は不完全な形でとはいえ発動してしまった。
不完全な術であるがゆえに想定していなかったこのような事態になったのでしょう」
「いや、でも止めないとダメだったんでしょう？」
風水・卜占と禁呪の邪仙なんてかなりやばそうに聞こえる。
空間、時間、理を捻じ曲げてくる存在がすることなんてろくでもないことだろう。
それを止めようとすることは正しいことのはずだ。
「良かれと思ってしたことであったとしてもその結果には責任を持たなければいけません。
ならば迷惑をかけられた方に謝罪することは当然ではありませんか」
これは今まで私の周りに居なかったタイプだ。
仙人としてならば彼女の考え方は悪くはないのかもしれないけど人としては生き辛いだろう。
いや、使役獣だからこそ彼女はこういう考え方になったのかもしれない。
ただ純粋に親である李華嵐から教えられたことを吸収し、成長した姿。
「それなら私は貴女の親とも呼べる人の身体を使っていることを謝らないといけない。
鈴華さん、私自身の落ち度ではないとしても本当に申し訳ないこ

とをしています。
　元に戻れるその時まではどうか私が華嵐として生きることを許して下さい」

私の演じていた李華嵐が何処かの世界で生きていた証。
そんな彼女にだからこそ私は謝罪の言葉を言わなくてはいけなかった。
自分の持ちキャラとか考えていた私は李華嵐を認めてはいなかったのだと思う。
彼女の力で異なる世界であってもこれから生きていけると思っていたのに何処かで李華嵐のことを下にみていた。

「えっ！あの、その私は貴女を責めるつもりはなかったのです。
　現状のことは致し方がないこと今後はどうなるかは判りませんが、
　貴女は貴女として生きて下さればよいと思うのです」
「でも、今の私は私自身の名前を覚えてないんです。
　だから華嵐の名を借りることを気を悪くしないでもらえると……」
「大丈夫です。華嵐様は私の母はそのようなこと気にするような方ではありませんもの」

蛇である彼女が笑っているかなんてわからない。
だけど私は今、彼女が微笑んでくれているのだとわかった。
優しいこの白蛇が私のために微笑んでくれているのだと。

「ありがとう。鈴華さん」
「鈴華で結構です。貴女も華嵐様なのですから」

無意識に私は彼女に手を伸ばす。私自身、何をするつもりだったのかわからない。
伸ばした手が何かをする前に鈴華が頭を摺り寄せたからだ。

触れたその頭を優しく撫でたのはこの身体に残る李華嵐の名残か。

「心配は要りません。私が傍に居ます」

「……鈴華にも私がいるよ」

家族になろう。そう言ったのは私ではなく李華嵐だ。

怪我をした白蛇を見つけ治療し、怪我が癒えた白蛇に言った言葉。

「ええ、私達は独りではありません」

耳に心地良い涼やかな声が肯定してくれる。それが嬉しくて私は笑う。

強固な繋がりは私達にはない。何処か曖昧でだからこそこの繋がりを大切にしたい。

華嵐には鈴華が必要で、鈴華には華嵐が必要なのだと信じたいから……

だから、今は彼女の中の瞳にあるその哀しみをわからなかったふりをすることを許してほしい。

8（後書き）

用語集

邪仙　（じゃせん）

央華封神でＰＣは陽気を高め輪廻からの脱却を目指す仙人であるが、

逆に陰気を高める仙人も存在し、その存在を邪仙と呼ぶ。

必要以上に相手を下にしない仙人や本質を見る仙人は陰仙（いんせん）と呼び、

それに対して自分達のことは陽仙（ようせん）と呼ぶこともある。

とはいえ、結局のところは悪いことばかりする輩が陰仙には多いので邪仙も間違いではない。

9

鈴華と話すことが出来た次の日。私はお世話になってから初めて外に出ることになった。
運ばれた時は寝ていたので家の外観をはじめて見たが見える家々と比べると少し小さい気がした。
私がお世話になるまでは独り暮らしだったわけだからおかしくはないと思うけど何か理由があるのだろうか？
扉を閉めたものの鍵はかけなかった。いや、寝る時は閂の様なもので戸締りしていたので外からかける鍵はないのかもしれない。
さて、今の『パパ』さんは狩りにでも行くのか初めて出会った時と似たような格好をしている。
私自身はサラさんが持ってきてくれた服を着ていた。
もちろん彼女が着せてくれた以外は誰にも手伝ってもらわずに一人で着替えている。
その日の夜にワンピースのような簡易な服たぶんパジャマ代わりを手にした彼が手伝おうとしたが断固として断ったのだ。
あまり見られないように隅っこで着替えたら彼が落ち込んだりしたが、そこは私の乙女心を優先させて頂いた。
そんな私の今日の服はクリーム色のシャツに茶色のスカート、靴は厚い布の靴だ。
髪はショートカットなのでサラさんがくれたクシで梳かすだけで問題ないと満足していたら、
『パパ』さんが私が着替えているのを確認すると当たり前のように私を片腕で抱き上げて外へと出たのだ。
今の私は肉体的には子どもなのだから、抱っこされるのは仕方がないことだと抵抗はしなかった。
だけど、子どもである私も狩りに連れて行くのだろうかと疑問に思っていると彼が言った。

『今からお婆様の……サラの家に行く』

『今』『サラ』『行く』という単語は理解している。
この三つから連想するのはサラさんのところに私を連れて行くようだ。
なるほど、子どもである私を家に留守番させるのは心配なのだろう。

『サラ、行く。私、はい』

理解出来たと思うと嬉しくて私は笑って頷いた。3日間でこれだけのことが理解できるとは素晴らしい。
真面目に勉強を続けたらもしかすると言葉を理解するのに1年必要ないかもしれない。

『……』

だが、私の顔を見て彼は微妙な表情をしている。眉間に皺を寄せてどうしたのだろう？
何か悪い物でも食べて腹の調子が悪かったりするのかと彼を窺っていると彼はため息をついて歩き出した。
ため息をつくと幸せが逃げてしまうとでも言いたいが、こちらの言葉はまだ完全ではないので諦める。
最初に抱っこされた時は余裕がなかったが今は木々の間でもないし、歩きやすいように手入れをされた道ということもあり私は辺りを見回した。
『パパ』の家は村の外側に位置している。そしてこの村自体は大きいものではないみたい。
そのようなことを確認していると彼の歩幅がかなり広いことに気付いた。

ここでの身長の平均などはわからないが日本人感覚な私は彼の背は高いと思う。
私は成人女性としては小柄な部類に入るので彼に抱えられている高さであるこの視点は珍しく感じる。
開き直って辺りを見回すのを楽しんでいると彼が村の中心ではなく外れ、
それも『パパ』さんの家よりももっと村から離れたところへ向かうことに気付いた。
サラさんの家に行くのではなかったのだろうかと不思議に思っていると先に建物があるのが見えた。

『サラ？』

生憎と家の単語はわからないので見えた建物を指差して尋ねてみると彼が頷いてくれたので正解だったとわかった。
サラさんの家は村にあるどの建物とは違っていた。石造りの家で何やら蔦が絡んでいる。
あの蔦は何だろうかと疑問に思い調べようとしてその行為を止める。
導引と口訣は変に思われてしまうだろう。
だけど、何かあった時に仙術を使う場合はどうしたらいいかと考えていると
そういえば導引と口訣は必ずしも必要ではない場合があることを思い出した。
普段のプレイの時には気にしていなかったけれどセッションにギミックとして使用したことがあった。
洞統で違うが導引と口訣が必要な場合は難易度は上がるが片方だけでいいし、
口訣は言葉が意味を持つわけではないので口が動けばよかったはずだ。
これであの木行の術は行使できるし、巫蠱にも似たような同じ条件

で使用できる術があったことを思い出した。
植物以外の鉱物や生物のことまでわかるという便利な術で、
行使値も華嵐は巫蠱の方が高いのだからそちらを使用するべきだった。

『ちょっと待ってろ』

『パパ』さんは家の前に来ると私を下ろし頭を撫でた後、扉をノックした。
扉自体は木で出来ているようだがかなり古いものらしいことがわかる。
建物に近づいたことと下ろされたことで私は蔦の方へと近づく。
音にならないように口の動きで術の口訣を唱える。草調知、文字通りに草を調べて知る術。
無事にその術はかかったようで私は蔦のことを知ることが出来た。
フッコル、葉は利尿・解熱作用があり茎の部分はしなやかだが乾燥すると硬くなるらしい。

『ロバートさん、カランちゃん。おはよう』
『おはよう』
『サラ、おはよう』

サラさんは『パパ』のことはトルロバートと呼ぶ。それが何故、パァノとなるのかは不明だ。
トルロバートという名前なのかもしれないがトルとロバートの間に少し間があるような気がするので
もしかしたらトルが称号や敬称とかそういうこともあるのかもしれない。
いや、ロバートの方がそういうものだという可能性も？
私としては呼び捨てっぽいので敬称をつけたいところだけど今のと

ころは注意されていないので良しとしている。もう少し言葉を覚えたら正してくれることだろう。

『今日は迷惑をかける』

『カランちゃん良い子ですし日中預かるぐらい大丈夫ですよ。

あっ！どうぞ中へ。ジョナお婆ちゃんにも会って行って下さいね』

『あぁ、そうさせて貰うよ』

サラさんに促がされて中へと入り先導する彼女の後について歩く。

家の中では何だかよく嗅いでいたようにも感じる匂いに気付き首を傾げる。

このような匂いを嗅いだ記憶なんて私にはあまりない。

これは身体の記憶なのだろうかと考えれば薬の調合つまり薬となる植物などを乾燥させたり、

煮詰めたりとする時の匂いに似ているのだと思い当たった。この場はそうしたことをしている場所なのだ。

『お婆ちゃん、ロバートさん達が来たよ』

そう思い当たったところでサラさんが開けた部屋にはあの医者か薬師だろう老婆の姿があった。

サラさんはこの人と一緒に最初は来たのだし、二人は家族とか師弟関係であるのだろう。

師弟関係にしてはサラさんの様子は気安いので家族である可能性が高いとは思う。

サラさんはこの部屋には入って来ず、何処か別の部屋に行くようだった。

『おはよう。二人共よく来たね』

老婆の前にはすり鉢らしきものとその手にはすりおろすための棒。
今まで動かしていたのだろう手を止めて彼女は私達に挨拶をしてくれた。

『お婆様おはよう。この子のことよろしく頼む』
『おはよう』

挨拶をするのが聞こえたので私も慌てて頭を下げる。
頭を下げることで年上の人に敬意を表していると思ってもらえばいいけれど。

『わかってるよ。面倒はみとくから安心して狩りにいきな』
『あぁ、ありがとう』

老婆はたぶん笑った。少しだけ口元を上げる笑いはわかり辛い。

『礼なんていいさ。あんたには山の結界を見てもらっている』
『山に入るついでだから負担じゃない』
『ついでにするにはちょっとばかり遠いだろう』

皺がある顔を顰めた老婆は彼に何かを訴えているにも見える。

『だが、この子に会えた』
『何だい締まりのない顔をして、子どもが出来たからって緩んでるじゃないよ。
まぁ、その顔はお前が生まれた時のお前の父ハダスそっくりだがねぇ』
『……』

彼は老婆の言葉に沈黙した。

雰囲気に違和感を感じて見上げるが身長差のためにその表情はうかがえない。
見上げた私に気付いた彼が私の頭を撫でる。
『さぁ！そろそろ行ってきな。早く済ませてしまえば早く迎えにも来れるだろう？』
『そうするよ。カラン、行ってくる』
『お前さんはここに居るんだよ。カラン』
老婆の言葉に頷くと彼は扉をと出て行こうとする。
それについて行った方がいいかと後ろに続こうとすると
後ろから声がかかったので老婆を振り返ったが彼は戻らない。
老婆と『パパ』さんへと視線を彷徨わせていると彼女は自分の膝を叩き。
『こちらにおいで』
招いているのだろうと解ったがそちらに向かう前に『パパ』さんのほうを見る。
彼はドアを開けて出て行くところだったのでドアが閉まる前に声をかける。
「『パパ』いってらっしゃい」
自分の声に振り返った彼に私は見送りの言葉を言った。今から彼は出掛けるのだから私が居るのは足手まといだ。
だから大人しくここに居るという意思表示を示しておこうと思っての行動だったがそんな私を見て彼はどう思ったのか。
『大丈夫、出来るだけ早く迎えに来る』

優しい口調と笑顔でそう言うとドアを閉めた。
足音が部屋から遠ざかるのが聞こえたので離れていったのだろう。
『やれやれ、ロブも父親に負けず劣らずの子煩悩っぷりだねぇ』
背後から聞こえた老婆の声は何だか呆れているようだ。
『パパ』さん、呆れられるようなこと言ってたわけ？
もしかして彼は少し変わった人なのかもしれないとお世話になっておきながら失礼なことを考えてしまった。

10

今日はサラさんに預けられたというよりも老婆こと『ジョナお婆ちゃん』に預けられたのかもしれない。
何故なら私はサラさんと居るよりもこの『ジョナお婆ちゃん』の近くに居ることが多いのだ。
私はそれが嫌だというわけではない。少しばかり厳しいようなキツイいな印象を彼女から受けるが……

『いいかい？これはクァークス、花と葉には疲労回復効果がありむくみや便秘にも効く。
　身体の悪い物を出して調子を整えてくれるものだ。ただ根は毒が含まれるから注意が必要だよ』
『花、葉、疲労回復、むくみ、便秘、効く。根、危険。はい、わかりました』

私にとっては大変にありがたい授業をしてくれるのだ。
薬師なのかずっと薬の調合をしている彼女はすり潰す前の乾燥されてはいても
原形を留める植物を見せながらその植物について教えてくれる。
まだ言葉の言い回しというか会話としては成り立たないが色々な単語を今日は覚えることが出来た。
ヤヤトという実は生食に向かないが乾燥させて粉にすれば腹痛に効くとか。
ルッツナは一般的な毒消しに使用されているなど、その単語は薬に使われる植物や動物に関することばかりだ。
どうして単語の意味が解るのかというと見せられる植物全てに術の草調知をかけ、
植物を見せながら彼女が話す内容に同じような言葉があると理解し

たからこそだ。
もしかしたら彼女は最初は目の前に居るからただ説明していただけかもしれないが、
私が理解を示した頃から詳しく話すようになったので今は教えてくれているのだと思う。
一度この様子を覗いたサラさんが『ジョナお婆ちゃん』にたぶん文句を言ったようだったけど、
私が好んで聞いていることを知った彼女は首を振って出て行ったので呆れられたらしい。
昼とおやつを食べた以外は『ジョナお婆ちゃん』にくっ付いていたわけなのでそれも仕方がないかな。

『おや、もうこんな時間だねぇ』

薬を調合していたその手を止めて呟いた様子に私は視線を彼女の顔へと向ける。

『そろそろロブが帰ってくるよ』

何を言われたのかはわからないがたぶん彼女の授業はお終いなのだろう。

『薬草、教える、ありがとう』
『良いさ。学びたい者には学ばせとくもんだからね。さぁ、サラのところにお行き』

サラさんの名前と『行く』という単語にきっとサラさんのところへ行けと言われたのだろうと
頷き立ち上がって部屋を出る前に頭を下げてからドアを開けて部屋を出る。

『ジョナお婆ちゃん』の部屋に居る時には気付かなかったが美味しそうな匂いがしていた。
サラさんは夕食でも準備しているのかもしれないと思い当たる。
台所の方に居るのだろうとそちらに向かう途中、表が騒がしいことに気付いた。
その騒がしさはこちらに近づいてきているがそれにつれて只事ではなさそうだ。

『何があったんだろう？』

サラさんも気付いたのか台所から出てくると何事かを呟いたが、すぐに何かに気付いた様子で奥の部屋へと大きな声を発した。

『お婆ちゃんっ！誰か運ばれてくるっ！
……カランちゃん、ちょっとここで待っててね』

その後に私を抱きかかえると台所の隣の居間と思われる部屋へと連れて行かれる。
私を下ろすとサラさんは椅子を引いてその椅子を叩いた。
ここに座って待っていろと言われているようだと頷き、示されるままに座った。
何が起きているのか気になるが彼女は緊張した様子なので下手に行動をしたら邪魔をしてしまうだろう。
慌てて部屋を出て行く様を見ていた私だが覚えのある気配に気付いてそちらを見る。

「鈴華！どうやってここに？」

彼女自身も隠れる気はなかったようで家具と床の隙間から出てきた。
外出が行き成りすぎたので彼女に何かを言う暇もなかったのにどう

してここにいるのだろうか。

「華嵐様達の後をついてきましたの。中に入ったのはそちらの窓からですけれど」

風通しの為にだろう開いている窓の方を鈴華が見る。
１５センチ程度しかない彼女からすれば簡単に入ってこれたらしい。

「よかった。ついて来てくれて」

鈴華が近くに居るといないとでは気持ちの持ち様が違う。
少し気が楽になって笑みを浮かべると彼女が近づいてきたので椅子から降りるとしゃがみ手を差し伸べる。
差し伸べた手からするすると腕に巻きついて袖の中に入ったが、少し膨らんだような感じになった。
普通は気付かれはしないだろうけど、これからのことを考えると不味いかもしれない。
抱き上げられたりする時に鈴華に気付かれる可能性があることを考えるとポシェットとか入れ物を持ち歩いた方がいいような気がする。
今後のことを考えていた私の耳に表の扉が開く音と複数の男性の声とサラさんの声が聞こえた。
緊迫した雰囲気を感じとったが待つように言われた身ではどうしようもないのでドアの方へと近づき様子をうかがう。
気配は『ジョナお婆ちゃん』の部屋へと向かっているようなので怪我人か病人かもしれない。
人の話声は聞こえるものの何を言っているのかわからないのがもどかしい。

「あちらの様子が気になるのでしたら、私が見てまいりましょうか？」

「えっ、いや悪いからいいよ」
ただの好奇心でしかないのでそれに他の誰かを巻き込むのは微妙だと首を振るが。
「お気になさらずに、これもまた私の役割ですもの。
それに私の感覚を借りれるかお確かめになられた方がよろしいでしょう？」
術者である私が本来の華嵐でないからこその提案でもあったらしい。
確かに鈴華の力を当てにして出来なかったではすまないので
今のうちに感覚器官を借りれるかどうかを確認した方がいい。
「なるほど、力を貸してもらおうかな。どうしたらいい？鈴華」
彼女の提案に納得して試してみることにした私は方法を尋ねる。
感覚を借りるってイマイチよく解らない。
「立ったままでも大丈夫ですが念のためにお座り下さい。
意識を私の方に移しますのでもし何かあって倒れられたら大変ですもの」
「危ないの？」
聞いた注意事項に危険なのかと首を傾げる。
ごく当たり前にセッション時には使用していた能力なので危険だとは考えていなかった。
危険であるのなら元に戻れた時に気軽に使用出来ないだろう。
「いえ何も無ければ危なくはありませんし、何かあってもすぐに気付かれると思います。

ただやはり他の皆様がいらっしゃらないので安全とは言えませんもの」

なるほど確かに李華嵐が感覚を借りる時は近くに誰かが居た。
本人が周囲を警戒出来なくとも代わりにしてくれる人や
守ってくれる人がいるがいるといないとでは大違いだ。

「うん、そうだね」

でも今は大丈夫だろうから安全なうちに能力を確認しよう。
まず椅子に座り、テーブルにうつ伏せになる。
これで倒れることはあまりないはずだし、誰かが覗いても眠ってると誤解されるだろう。

「それで次は何をするかですが……」
「うん」
「よくわかりませんの」
「えっ？わからないの？」

まさかの教えられることは何も無い発言に驚いた。
何かアドバイスがあるだろうと期待していただけにがっかりして肩を落とす。

「仕方ありませんでしょう？私は感覚を貸すほうでしたもの」

私の態度に少し拗ねたらしいことが声で解る。
こういうことがわかる時点で私の感覚は華嵐の記憶などにだいぶ影響されている。
それも当然のことだとは思う。この身体は私のものではないのだ。

「まぁ、出来るだけ頑張ってみる」

この身体は経験していることだし、考えるよりも行動しよう。
私は目を閉じて何か普通とは違う感じがないかと探る。
違和感があればきっとそれが関係するはずだと思ったからだ。

11

予想は大ハズレだった。違和感を感じることを意識していたがそんなものは感じなかったからだ。
どうすればいいのかと情けないことに頭を抱えた私を肩の上で見つめる鈴華と目が合い。
今の彼女から私は一体どうやって見えているのだろうと考えた時に視点が切り替わり、
幼い子どもが顔を歪め頭を抱えている姿は情けないというよりも憐れに見えるということがわかった。

「えっ？」

突然の視界の切り替えに驚いて声をあげると視界もまた戻った。
鈴華の方を見れば小さな白蛇の赤い瞳に私の顔が映っている。

「華嵐様、一瞬でしたけれど成功いたしましたね」
「そうか。出来たんだ」

一瞬のことであったので気のせいかと思った私に鈴華が声をかけたくれる。
視界が共有されたことに貸すほうである彼女も何らかの感覚を感じるらしい。

「それではドアを少し開けて下さい」
「うん」
「ほんの少しの隙間で結構ですから」

言われるがままにドアをほんの少し3センチもないぐらいに開ける。

隙間から細長い身体で部屋の外へと鈴華が出る。
今だ話し声が聞こえる『ジョナお婆ちゃん』の部屋に彼女はすぐには進まず。

「こちらでお待ちしております」

なるほど急に変わるのも問題かもしれない。
私は頷くと先程のように椅子に座りテーブルに上半身を寝かせる。
気分的な問題として目を瞑り鈴華がいる方を見たいと意識する。
それだけで当たり前のように私の視界は変わった。
いつもとは違う低い視線と身をくねらせて動く身体に戸惑いつつも馴れてきたので
『ジョナお婆ちゃん』の部屋へと近づくことにする。
言葉が解らないので話の内容はわからないが覗ければ状況がわかるかもしれない。
幸いなことに部屋のドアは閉まっておらず中には入れるようだ。
入るかどうしようか迷って部屋の中へと入ることにした。
見つかったとしても鈴華は回避値が高いし、万が一捕まっても私が助けに行けばいい。

『ゼファ！気をしっかり持つんだよっ！サラ、まだかい？』
『あと少しっ！』

覗いた部屋の様子はサラさんが薬草を摩り下ろし、
『ジョナお婆ちゃん』がベットの上でぐったりとした様子で横たわる男性の近くで治療をしているようだ。
その少し離れたところで青ざめた様子の年配の男性が立ち、男性に声をかけている。

『ゼファ、死ぬなっ！ゼファ』

繰り返し呼ばれる単語、ゼファとは横たわる男性の名前か。
必死に叫ぶように呼びかける声に横たわる男性は応えない。
それを見て安易に見てみようと決めた自分の行動の愚かさに我に返った。
すぐさま意識は鈴華の身体から華嵐へと戻ったが今見た光景に身体が震えている。
サラさんが摩り下ろしていたすり鉢の横にあった薬草はルッツナ、一般的な毒消しとして使われている薬草のはずだ。では、あの男性は毒を受けている？

「ダメ、ルッツナでは効果が薄い」

返事も出来ないほどに毒が回っているというのならルッツナは役不足だ。
そうだと『ジョナお婆ちゃん』自身も言っていたと記憶しているし、噛まれた直後の初期段階で効果を発揮するものだと調べた私にはその知識がある。

「……死んじゃうかもしれない」

会ったこともない顔も知らない人だ。だけど、これから会うかもしれない人だ。
彼がこの村の住人であるのならいつかは会ったかもしれない人なのだ。

「私は華嵐じゃないか」

震える身体は止まらないがそんなことにはかまってられない。
イスから転がり落ちるようにおりてドアの隙間を広げて出て行く。

『ジョナお婆ちゃん』の部屋に着くまでの短い距離が、そしてこの小さな身体が恨めしい。
私は出来るだけ急いで部屋へと駆け込む。

『カランちゃんっ！』

鋭く咎める声に怯みそうになる気持ちを抑えて横たわる男性へと近づく。
私の行動を止めようとするかのように『ジョナお婆ちゃん』は動いたが、
それを回避して男性に近づけば治療の為に切り裂かれた服とそこから覗く彼の肩がどす黒く染まっているのが確認できた。
まだ少年といってもいいぐらいの若さの彼の顔色は青ざめて唇が紫色となっている。

『邪魔だよ。出てお行き』

咎める声が聞こえる。それでも私は出て行くわけには行かない。

「病調知」

導引を素早く刻み、口訣を音にする。何も考えずにただ身体が動くままに私は行動した。
彼の身体は確かに毒によって蝕まれそれは虫によるものだ。
その毒は今まさに彼の命を奪おうとしており躊躇う時間はない。
サラさんがすり潰している物へも術を使う。
今の彼には効かないものだとはわかると同時に別のこともわかる。
このすり潰したものに別の植物を二つ混ぜればいいのだ。
私は薬草などが置いてある棚から目的の植物を探す。

「鈴華っ！上から2番目の棚の４番目の薬草を落として」
一つは届かないところにあるがもう一つは何とか届きそうだ。
『あっ！ダメよっ！』
棚に近づいた私に制止の声を無視して目的の薬草を手に取り、
鈴華が落としてくれた草を逆側の手でキャッチする。
『カランお止めっ！それは毒だよ』
毒。知っているよ『ジョナお婆ちゃん』。私が失敗したら彼は死んでしまうだろう。でも何もしなくとも彼は死ぬ。
判るんだよ今の私には『ジョナお婆ちゃん』達に彼は救えないと傲慢にもそれが理解できてしまった自分に涙が出てくる。
泣いてなどいられない。私は華嵐だ。この手が届くなら人を救うと誓った。
私はその薬草と毒草を口に入れて噛み、すり鉢からサラさんがすり潰した物も同じように口に含む。
毒草を私が口に入れたことで呆然としていたのかサラさんからの制止はなかった。
口の中に物が入っているので口訣は出来ないが導引を結び術を完成させ、
出来た薬を少年に塗ろうと近づくと私は少年の傷口に薬を吐きかけた。
『何するんだこのガキっ！』
少年の近くに居た男性が私に腕を振り上げるのが見えた。
それを避けるよりも私は少年に膏薬を塗りひろげることを選択する。

受けることも回避することも選択しなかった私の身体は男性の手で上から払いのけられる。
仙人だとしてもこの身体は小さな子どもと変わらない重さしかないのだから当然か。

「華嵐様っ！」
『カランちゃんっ！』

身体が床に叩きつけられた後に聞こえた二つの声。
鈴華とサラさんの声は二人共心配してくれたのだろう。
サラさんは私がこんな行動を起しても心配してくれるのだから優しい人。

『ジョナお婆ちゃん、毒、効く、薬』

言いたいことを伝える単語だけの言葉。ですぐらいは付けたいものだ。
私は口元を拭ってその手についた緑の液体を見る。
先程この手で薬を塗りひろげたのだから、私の顔は悲惨なことになっていそうだ。
本当なら薬を塗った彼を見たほうが良いのだろうけどそれが出来ない。
薬を作ったとは思ったがそれが勘違いだったり、薬が効かなかったりした時にどうすればいいのかわからないからだ。
確認することが出来ない私は臆病にも視線を床へと下げた。

12

少年の様子を『ジョナお婆ちゃん』は診る。それが彼女が先にしたことだ。
医療行為を行う者として正しいことだと思う。
払いのけられてすぐさま言葉を発したものと今まさに死の淵にあり、子どもから毒が含まれる液体を傷口に塗りたくられた者と優先する方は明らかだ。
起き上がらない私の近くにサラさんが寄ってきて私を仰向けにするとコップを差し出してくる。

『カランちゃん、口の中を濯いで』

水が入ったコップの意味がわからずに彼女を見ていると彼女自身が水を口に含み床へと水を吐き出す。
同じ行為を私にするように示したのだと理解して大人しく同じように水を口に含み水を吐き捨てた。
今まで見たこともない厳しい表情を彼女はしており、それは私自身の起した行為のせいだとはわかってはいる。

『お婆様、ゼファはっ！』
『……熱が出てきておる』
『助からないのか？』

男性と『ジョナお婆ちゃん』の話す声が聞こえる。
切羽詰った彼の声に少年を救うためとはいえ、何の説明もなしに私がした行動は不安にさせただろう。
けれど私には説明する言葉も時間もなかった。
不味過ぎるこの片言も片言の言葉で誠心誠意を込めたところで

見た目が子どもであることなどを考えれば説得など無理だ。

『そうではないコルド、この熱は毒素を体外へ出そうとしておるからだ。

ガビギーラの毒の症状は体温が低下しすぎて死に至るもの、体温の低下をさせないことが重要となる』

ガビギーラは毒虫の名で少年の受けた毒の正体だ。
身体の機能を低下させ、体温が低下していく毒。
その説明の時に熱という言葉が出ているということは……

『熱が出ているということは助かるんだろう？お婆様！』

彼は助かるかもしれない。

『明日の朝までゼファが乗り切れれば助かるだろう』
『頼む。お婆様』
『わしに出来るだけのことをするだけだよ』

心に灯る希望に私は少年を見た。
青ざめていた少年の顔色に赤みが戻っていた。
きっと助かる。彼は死んだりしない。

『ジョナお婆ちゃん？』

少年へと向けられていた意識がサラさんの戸惑うような声にそちらへと向かう。

『サラ、ゼファを寝かすためのベットを整えな。あぁ、熱が上がってきたね。

後は発熱に伴う汗を拭うための布と水分不足を補うための水も準備だよ』

『ジョナお婆ちゃん』が何か指示をしているようだ。
それを受けたサラさんが私へと視線を向けたので、
きっと何処かに連れて行かれるかするのだろう。

『その子は置いていきな』
『でも』
『大丈夫だよ。カランおいで』

連れて行かれると思っていたのに名を呼ばれ手招かれた。
私は迷いながらも『ジョナお婆ちゃん』へと近づく。

『コルド、お前の息子が助かるとすればそれはこの子のお陰だよ』

近づいてきた私を男性の方へと押し出して『ジョナお婆ちゃん』が何かを言っている。

『この子どもの？』
『そうさ』

向けられる男性の視線に身体が震える。
私はどういう理由であれ彼を不安にさせた謝らなければならないだろう。

『……ごめんなさい』

こちらに土下座の文化があるかはわからないので頭を出来るだけ下げる。

相手に理解できないことでの謝罪はあまり意味がないと思ったからだ。

『悪かった』

膝をついた男性の手が私の手を握る。その手は硬くざらついている働く者の手だ。

『パパ』もこんな手をしていた。この世界の誰もがこんな手をしている。

華嵐の手は子どもゆえに柔らかいのだろうが私の元の身体の手と比べても彼等の手は硬かった。

これがこの世界で生きる人の手なのだ。

『俺の息子を助けてくれようとしたのに』

男性の声は怒っていないどころか後悔の色があった。

頭を上げて男性を見上げればその目は潤んでいるようで慌てる。

『それぐらいにおし、この子はまだ言葉を理解できていないんだ。ただのありがとうで充分だよ』

『あぁ、ありがとう。ありがとう』

涙目の男性に両手を握られて礼を言われる日がくるとは思ってもいなかった。

彼の様子からすると『ジョナお婆ちゃん』が何かを言ったのかもしれない。

私はどうすればよいのか判らなくて困った。サラさんは部屋を出て行っている。

『ジョナお婆ちゃん』はこちらよりも少年を見ているし薬棚には鈴華がいるが彼女に助けを求めることは出来ない。

よくわからないが鈴華が目を光らせて男性を見ている。あれは怒っているのではないだろうか？
彼女の性質から襲い掛かりはしないだろうが華嵐である私が乱暴に扱われたことは腹に据えかねるらしい。
嬉しい気もするが華嵐だからと思えば複雑な気持ちになり私は鈴華から視線を逸らして男性を見る。

『どういたしまして』

礼を言われたらこう言い返すのだと教わった言葉を言う。
今の私はちゃんと笑えてる？　笑顔が引きつっているかもしれない。
だって、礼を言われるような人間ではないからだ。
自分の信念ではなく借り物の信念で行動する私は褒められるような人間じゃない。
それを自分が一番理解しているからこそ彼の感謝の言葉を素直に受け取れなかった。

13

自分の行動を後悔はしてはいないが誇れるものでもないと感じている私は
大人しく『ジョナお婆ちゃん』がゼファ少年を看病している様子を見ていて、
鈴華は誰にも咎められることなく今は私の腕に巻きついている。
熱が上がって苦しいのだろうその様子に何かをしてあげたくても
今は私が何かすることのほうが邪魔になってしまうとわかっているから
何をするでもなく彼女の行動を見ていた私の耳に表の扉が叩かれる音が耳に入った。

『ロバートだ。サラ入ってもいいか？』

この声は『パパ』さんだ。
数時間しか離れていないはずなのにひどく懐かしく感じる。
彼は私が起した行動をしらずただの子どもだと思っている人だ。

『ロブが戻ってきた。カラン』

扉の方を差されたことで自分が行くように言われていると思い立ち上がった。
部屋を出る前に少年を見つめ、充分に体力がある様子を確認して『パパ』さんのところへと急ぐ。
あの後にサラさんからまた服を借りて替えたので汚れてはいないとはいえ、
服が変わっていることに彼は不思議に思うかもしれないが言い訳は出来ない。

『パパ』

サラさんは別の部屋で何かをしているのかまだ来ていないが、大丈夫だろうと扉を開けて『パパ』さんを出迎える。

『ただいま、カラン。服が変わっているが何か零したのか？』

今朝と変わらない笑顔で彼は私を抱き上げた。
当たり前のように私を抱き上げる彼に安堵して彼の服を掴んだが、彼が今朝とは違う服装なのをみると一度家に戻ってから寄ったのだろう。
いや、それとも今日からサラさんの家に私は居候をすることになったのだろうか？
今朝まではそれでもよかったがことがあっただけに今は遠慮したい。

『ロバートさん、おかえりなさい』

草の汁などで汚れたエプロンをつけたサラさんが顔を覗かせた。
その笑顔が以前と違うように思うのは私の気のせいというものか。

『サラ？どうしたんだ』
『あっ……今、ゼファ君がガビギーラの毒にやられてここに運ばれてきたんです。
熱が出たのはいいんですけど高すぎると危険なのでその熱を下げるための薬を調合してました』

『パパ』さんの言葉にサラが答えている。
ゼファという単語が聞こえたので少年のことを説明しているようだ。
話を聞いたらしい彼の顔が曇っていく。

『ガビギーラに？熱が出ているのなら一安心だがあの虫はこのあたりにはいないはずだろう？』
『そうなんですか？ゼファ君はコルドさんと畑を広げるために藪を刈っていた時に
その噛まれたって言っていたのでごく少数がいるのかもしれません』

深刻そうな表情と声からしてあまり良いことは言っていない。
彼等の話を推測するにしてももう少し言葉を覚えないといけないなぁ。

『あの虫にはこの辺りの温度は低すぎるはずなんだが……
しかし、流石お婆様だな。ガビギーラの毒を解毒できるとは』

低い、ガビギーラの毒、解毒。
『パパ』さんはガビギーラの毒が解毒出来たのか聞いてるのかな。

『えっ、あの……』
『なんだ？』

言葉をためらっている様子のサラさんを私は見る。
彼女もまた私の方を見たために目線が合ったけれどその視線はすぐに逸らされた。
……やっぱり私の行動は常識ハズレだったようだ。前とは違うその反応に私も視線を落とす。

『サラ、薬が調合できたのならゼファに飲ませてやんな。かっきり一匙分だよ。
そのままゼファの看病をしばらく代わっておくれ』

彼女が何も言う前に『ジョナお婆ちゃん』の声が聞こえたので視線を上げると『ジョナお婆ちゃん』が部屋から出てきていた。
ゼファの看病をしていたはずだけれど少年を一人にしても良いのだろうかと私はゼファがいる部屋のドアを見る。

『はい、ジョナお婆ちゃん』

サラさんがその言葉に慌てたように出てきた部屋に戻ったがすぐに出てきて、
その手に調合したと思われる薬を持って少年が眠る部屋へと入っていった

『ロブ、とんだ拾い者をしたね』
『お婆様？』

『お婆ちゃん』と『お婆様』よく似ている。
どちらも『ジョナお婆ちゃん』を示しているようだ。
名前なのかそれとも職業とか役職とかなのかな。

『ゼファをガビギーラの毒から救ったのはその子だよ』
『まさか』

『パパ』さんが驚いたように私を見た。これは私の行動を聞かされてしまったのかもしれない。
結果的には悪いことをしたわけではないが私の今後のことを考えると不安になる。
でも、下手なことでは今の自分は死なないだろうから私の行動は正しかったはずだ。
自分にそう言い聞かせながら手を強く握り締める。

『……ガビギーラの毒にルッツナは効果が薄い。
それをわかっていて飲ませないよりマシだとサラに調合させたんだよ。
苦しみを延ばすだけの行為だとしてもあたしは僅かな可能性をも信じたかったからね』

老いたその声に何処か力がない。
私に薬草の話をしてくれていた時とは全く違うその様子に疲れてしまったのだろうかと心配になる。
この世界のことを知らないので年齢はあまりわからないが彼女はかなりの高齢のようなのだ。８０歳ぐらいは越えているように思う。
なのでゼファ少年の治療で疲れてしまっても無理はないだろう。

『お婆様が救えないのなら多くの医師や薬師といった他の治癒師もまた同じだ』
『それは言いすぎというものだよ。あたしは救えぬ命があったからこそ他の命を救うために学んできた。
そして多くを救うために知識を人に伝え、代わりに知らない知識を求めた。
しかし、そうしてもなお救えぬ命が多すぎた……』

深いため息。何か重要なことを言っているみたいだ。
理解できないことがとてももどかしいが私が理解できないからこそ喋っているのだろうとも思う。

『……お婆様』
『だがあたしは希望を見つけたんだよ。この子には素晴らしいものがある。
あたしはこの子にあたしが知る全てを教えてあげたいと思ってい

る』
『この子に？……サラはどうなんだ？あの若さで驚くほど腕がいい』
私を自分の後ろに隠すように『パパ』さんが動く。
それは『ジョナお婆ちゃん』の言葉に対するもののようだけれど、
彼は無意識に私を隠すように動いたように見えた。

『あたしからしたらまだまだだよ。もちろんあの子にもこれからも教えるさ。
……だがね。治癒師は一人でも多くいた方が良いさ』
『まだこの子は幼い』
彼は否定するように首を振り、そうして私の頭を優しく撫でた。

『幼くともこの子は優れた治癒師になれる。そのように教育も受けていたようだよ。
この子は少なくとも効能ある植物の知識とそれを扱う術を教えられているのさ』
『そのような教育を受けていたとしても人の死に触れるには早すぎる』

二人共声を荒げる様子はないというのに対立しているように感じて、
『パパ』さんの身体から少しはみ出て『ジョナお婆ちゃん』を見る。

『この子は死を理解しているよ。ゼファの様子に怯えていた。人が死ぬことに怯えていたんだ。
死を理解し自分はそれから遠ざける術を持っていると理解していたからこそ怯えていたのさ。
……この子は患者の死にひどく傷つくだろうが同時に次の命を救うことに執着するだろうね。

失った一つの命のために少しでも多くの命を助けるためにその手段を欲する。
まさにそれこそがあたしが求めていた才さ。それをこの子の中に見たんだよ』

声に張りが戻っている。
何かを強く訴えているようだがそれを『パパ』さんは首を振ることで否定し。

『お婆様それはまるで狂人のようだ』

身体からはみ出て彼女を見ている私の頭を撫で隠すように動く。
これは先程の無意識での動作ではなく意識しての動きみたいに感じた。

『狂人か言い得て妙かも知れないね！』

笑い声をあげ『ジョナお婆ちゃん』の声が大きくなった。

『人を癒すことに執念にかられて生きる……だかねロブ、この国にはそんな狂人が必要だ。
かつて七英雄によって築かれたこの国は僅か百年足らずでもう綻び始めているのさ』

だけれどすぐにそのトーンを戻すと笑みを引っ込めてしかめっ面になった。
彼女は彼の言葉が気に入らなかったのかな？
雰囲気が重苦しいので私としては大変居た堪れない。

『……綻びとは？』

『都で騎士となったことがあるからこそお前にもわかるはずさ。
一つは隣国との国境沿いで小競り合いが増えていることだけどね』
『……』

押し黙った『パパ』さんを見上げる。
痛みに耐えるような辛そうな表情をしているように見えた。
何か彼にとっては嫌なことを言われたのだろうか？

『あんたがこの子の親になるというのならね。考えてほしいのさ。
優れた治癒師となれるだろうその才を伸ばす生き方というものをね』
『お婆様、カランが嫌がるようでしたら何時でも止めさせる』
『いいさ。でも、そうはならないと思うがね。明日もその子を連れて来るんだよ』

フンッと鼻息荒く『ジョナお婆ちゃん』は何かを言うと背を向けた。
彼女はきっとゼファ少年を見に行くのだろう。

『帰ろう。カラン』

彼女の背を見送っていた私の前にしゃがみ込んで『パパ』さんが笑った。
その笑みが疲れたように見えたので迷惑をかけてしまったようだと理解できた。
明日からは大人しく出来ると思うので放り捨てたりしないでほしいと願っていると彼は私を抱き上げた。
今朝と変わらないその行動に放り捨てられることはなさそうだと安心して服を掴む。
精神的疲労のためだと思うけれど安心したことで眠気が襲ってきた。
我慢出来る範囲だからと我慢していると背中を優しく叩かれてその

我慢も難しくなっていく。
……まぁ、今後のことは目が覚めたら考えよう……

14

誰かの視線を感じて目が覚める。
普段なら気のせいと思ったことだろうけど感じる視線の主は目を開けるとすぐに確認できた。
何だか恨みがましい目でこちらを見てくるのは可愛らしい一匹の白蛇。

「おはよう、鈴華」

彼女が姿を見せているということは周りに誰も居ないのだろうと声をかける。

「おはようございます」

言いたいことがあるのだろうに私の挨拶に頭を下げると律儀に答えてくれた。
この身体は低血圧ではないようですぐさま身を起すことが出来る。

「よくお眠りでしたのでお待ちしておりましたの」
「うん……あー、ごめん。鈴華が戻ってくるのを待ってませんでした」

鈴華が何を言いたいのかを理解して頭を下げる。彼女に色々と昨日は頼んだというのに私はお礼を言うことなく眠っていたのだ。
この身体は見た目は子どもとはいえど実際は違うのだから眠くて仕方がなかったという言い訳が出来ない。

「もう仕方ありませんね」

素直に謝ると彼女が許してくれたので胸を撫で下ろす。
頼りになるこの相棒を失ってしまうのは避けたい。
よほどのことがない限りは困っている私を彼女は見捨てないと思うけど……

「それに私も戻ったのは早朝でしたから」
「そうなの？」
昨日と同じようにすぐに追ってきたのだと思っていた。
その違う理由が浮かばずに鈴華を見つれば彼女は説明してくれる。

「……もしかしたら患者の様子を知りたいかもしれないと思って」
「あー、それは本当にごめん」

感覚共有が出来るのだから彼女が患者の近くに居れば様子は見れたのだ。
そうしたいかもしれないと考えて行動してくれていた彼女には大変申し訳なく思う。

「私と感覚が繋げたのは昨日が初めてでしたもの仕方ありません。
でも、次からは簡単な指示ぐらいはお願いしますね。
言葉でのやり取りはありませんけれど簡単な意思疎通は出来るのですから」

鈴華の言葉に私は頷いた。一度、感覚共有したからか彼女の言いたいことは理解できる。
テレパシーのようなやり取りは出来ないけど何となく程度の意志のやり取りは出来た。
先に進む時にどうやって進むか迷った時に進みやすさ、人の見つかり辛さなどを伝えてくれるのだ。

これは明確な言葉ではなくてそちらの方が良いだろうというような何処か曖昧なもので私がそれに逆らうのは簡単だったことだろう。逆に彼女のほうも私が迷ったりした時にそれを感じているということでこちらの帰還の意志というものも思えば通じるのだと思う。

「あのさ。運ばれてきた少年のことだけど」

「峠は越えたようでしたわ。ですから、私も戻ってきたのですけれど」

指示がなくとも考えて行動してくれる彼女にセッション時との違いを感じる。

使役獣はＰＣに付属するＮＰＣのような扱いでＰＣが選択したり、術で別れたりしない限りは単独行動はとらない。

彼女が考え行動するという事実に鈴華という存在が今の私、華嵐の付属品ではないのだと自覚させる。

「様子を見ててくれてありがとう」

きっと急変したとしたら彼女は私のところに急いで知らせに来てくれたことだろう。

勝手に一人でいっぱいいっぱいになっていた私のために頑張ってくれた彼女の頭を指の腹で撫でる。

華嵐達は普段からスキンシップをしていたようで褒める時には触れることが自然に浮かんだ。

思い返してみると他の使役獣達を褒める時にもこうして頭を撫で……あれ？華嵐の記憶を思い返すことが出来る。

目覚めた時には確かに私は華嵐自身の記憶などほとんど覚えていなかったのに。

「どうしましたの？」

心配そうに見上げるその瞳に首を振る。

「何でもない」

思い返そうとすれば華嵐のかつてが思い浮かぶ。一つのことを思い出せばそれに連なる記憶が出てくる。
全てを思い出せているわけではないとは思うけど確かに目覚めた時よりも思い出すという行為は容易で、思い出す内容もどこか懐かしく感じた。

「『パパ』が来るまでに着替えようか」

今はあの時よりも混乱していないから思い出せるようになったんだろう。そう結論付けて私は変に悩まないようにする。
想像力だけは無駄にあるのだから深く考えようとすれば妙なことまで考え出すかもしれない。
あまり考えないようにしようと身体を動かすためにベットから降りて今日の服を選びはじめた。でも、この服の全てはサラが持ってきてくれたものだということを思い出して憂鬱になる。
もしかしたら彼女は私にこの服を着てもらいたくないかもしれないと手を止めてしまう。

『カラン、起きているか？』
『パパ』

部屋の外から『パパ』が顔を覗かせた。
彼が来る前に着替えるつもりだったのに手を止めたことで間に合わなかった。

『お前は朝起きるのが早いな。俺が子どもの頃はもう少し寝てたんだけどなぁ』

部屋に入ってきた彼は私の頭を撫でて何かをいう。
声の調子からすると褒められているような気もするけど意味はわからない。

『服が着れないのか？いや、次の日からは一人で着てたんだからそうじゃないよな。
ああ、もしかして何を着ればいいのか迷っているんだろう？……幾つでも女は女ってことか』

何か最後の部分はため息交じりだった。
何を言ってるのだろうかと彼を見上げれば私の後ろからタンスの中を覗き込んできた。

『今日はこれなんてどうだ？今日もおばば様のところに行くのなら動きやすいほうがいい』

タンスの中から選ばれて取り出されたのは簡素なワンピース。
薄緑色で染められたそれを彼が差し出してきたので私は受け取る。

『着ないのか？』

受け取っても動き出さない私に『パパ』が首を傾げる。
そうして仕方がないとでも言うように彼はため息をついて手を伸ばしてきた。
その手がパジャマ代わりの木綿のようなもので出来たワンピースの裾を掴んだので咄嗟にその手を叩く。

『何だ？』

軽くなので別に痛くはないはずだが彼はその手を止めて私を見てきた。

『パパ、あっち』

お願い事ではあるので笑顔で私はドアを差して彼の退室を促がす。
身体は子どもであろうとも私の心はうら若い娘なのだ。
動ける身体で男性に着替えさせてもらうほど女を捨ててるはずがない。

『何だ。恥ずかしかったのか』

プッと吹き出された。
彼の笑みにイラッときたがここは私が我慢することだろう。

『パパ、あっち』
『わかった。わかった』

もう一度、先程の言葉を繰り返せば彼は頷いて外へと出て行く。
彼が部屋を出てドアが閉まるのを確認した後にのろのろと着替えを始める。
着替えなければ今度こそ着替えさせられるかもしれないし、そもそも今着ている服も彼女が持ってきたものだ。

「鈴華、今日も服の中には入れられないけど」
「大丈夫です」
「よろしくね」

着替えて鈴華が潜むような場所がないのでそう断っておいた。
彼女は私の居場所が察知出来るようだし問題はないはずだとは思うけど。
待たせているだろう『パパ』に着替えが出来たと教えてその後に朝の身支度をしよう。
今日これからどうするかは彼の今後の行動次第だ。

15（前書き）

この話からこの世界の共通言語を「　」にし、それ以外の言語を『　』表記にします。

15

昨日と同じように私はサラさんの家に連れられてきたことに安心すればいいのかは迷いどころだ。
でも、あの少年を診ることが出来るかもしれないと考えればサラの家にまた来れたことは悪くはないと思う。
パパが昨日とは違って私を腕に抱えたまま扉を叩いた。

「ロバートだ。おばば様、サラ居るか？」

よく聞く単語、たぶん人の名前だろうものを彼は大きめな声を発した。
家の中に聞こえるようにだろうけど抱えられている私としてはいきなりで驚いてしまったが、
彼が口にしたロバートが彼の名だとするとおばば様はジョナお婆ちゃんのことだ。
やはり立場か何かでの名が彼女にはあるようだ。とはいえ、私は教えられたジョナお婆ちゃんと呼ぶしかない。
ロバートのことは子どもである私はそうあるべき呼び方をしていると考えていいはずでたぶんお兄さんとか呼んでるんだろう。

「ロバートさん、カランちゃんもおはよう」
「ああ、おはよう」
「おはよう」

昨日と同じく扉を開けてくれたサラさんは笑顔で挨拶をしてくれたが、彼女から緊張を感じた。
それを隠そうとしていたようなので気付かぬふりをして笑顔で挨拶を返せば彼女の肩から力が抜ける。

昨日のことでサラさんは私に対して何かを思ったようだけれど今までと同じように接することを決めたみたいだ。
それならば私はそれを受け入れて私も同じようにサラさんに接しよう。
私のほうが彼女よりも年上なのに受身でずるい考え方だとは思うけれど今はそうすることしか思い浮かばなかった。
うん、お詫びの気持ちも込めて今日は良い子を演じるので勘弁してね。ああ、演じるとか思ってる時点でダメな気もしてきた。

「カランちゃん、ゼファくんがお礼を言いたいって言ってたよ」

落ち込んで俯いた私にサラさんが声をかけてくれた。
私の名前と昨日運ばれてきた少年の名、サラさんが笑っていることからして責められているようではないみたいだ。

「ゼファは気付いたのか」
「はい、夜中に一度、今はまた眠ってますけど」
「そうか。よかった」

おや、パパもゼファ少年とは知り合いだったのかと考えて明らかに村だろうここでは当たり前かな。
村ぐるみで家族のような付き合いをしていてプライバシーがない的な土地柄ではないだろうか。
私としては嫌いではないがそういった場所で住んだことはないし、時に余所者を排除する方向に動くらしいので注意が必要だよね。

「サラ、カランを預かってくれるか？おばば様に話をしてくる」
「はい」

少しばかり考えごとをしていた私はいつの間にやらパパからサラさ

んに受け渡しされていた。
７歳の子どもでも女性には少しばかり重くないか？と思ったが、そういえばここの人達は大きい気がする。
私が子どもの姿になったからそう感じているのかもしれないが数は少ないが見かけている人は１７０センチはありそうだ。
年老いて縮んでいるだろうジョナお婆ちゃんですらそうだし、サラさんはそれから１０センチは高いし、パパさんはそれに足して２０はあるだろう。
子ども扱いは身体が小さくなったからだと思っていたが人種的に身長の平均が違うのなら７歳児ではなくてもっと小さく見られている可能性は高くないだろうか？
あれれ、そうすると３、４歳ぐらいの子どもとか思われてたりする？いや、お喋りしてる時点でそんなことないよね。
成長は急務かもしれない確かそういう丹が作れるはずってダメだ。
急激な成長が説明つく世界かわかんないよ。
そういえば普段は見た目の成長を止めてるんだった。せめて普通に成長出来るようにしとかないと……その成長速度が万が一ここでは異常だとしてもそれは仕方がないと諦めるしかない。

「朝は食べてきてるものね。ゼファくんは眠っているけど様子を見てこよっか？」

サラさんの言葉はいまいち理解できなかったがいい子の私は頷く。
彼女のことなので私に悪いようにはしないはずだ。
何とパパの家からここまで抱っこされたまま運ばれてきている。
羞恥心とかなくなってきた私は人間とは馴れる生き物だと実感する。
一つのドアの前でサラさんに下ろされた後、彼女はドアを軽く叩き。

「ゼファくん、起きてるかな？」

声をかけるが返事はなかったがサラさんはドアを開けた。
部屋の中にはベットが二つ、そのうちの一つは整えられていたがもう一つのほうには誰かが寝ている。
それは昨日の少年で様子が気になった私は彼が寝ているベットへと近づいて彼の顔を覗き込む。
私が見た時よりも疲労感はあっても顔色はだいぶよい。

「眠ってるね」

サラさんは彼が眠っていると言っているのだと思う。
夜寝る前にパパが言う言葉と似ているからの判断なので実は違うかもしれないけど。

「あっ」

覗き込んでいたゼファ少年の瞳が開いた。
綺麗な翡翠色の瞳、昨日も見たかもしれないがその時には気付かなかった。
髪は赤みがかった茶色で前髪は短めに切られているが他の髪は長めで肩の下辺りまである。
昨日の男性が父親であるとするのならあんまり似てない親子かもしれない。
彼のすっきりとした顔立ちは女の子のようにも見える。
今は15歳ぐらいかな？どう成長するかはわからないけどこのままなら将来的には女性にもてそうだ。

「おはよう」
「……おは……よ」

目が合ってしまったので挨拶をしてみる。

目覚めたばかりの彼は状況を把握していないのか挨拶はしたものの視線を彷徨わせた。

「ゼファくん、おはよう。喉が渇いたでしょう？飲み物をもってくるから待っててね」

サラさんは慌てたように部屋を出て行く。
私のことは放置だったのでどうすればいいのかと彼とサラさんが去ったドアを交互に見つめ。
翡翠の瞳が私をじっと見つめていることに気付き、笑うことにしてみた。挨拶は基本だよね。

「……！」

何故だか彼を驚かせたみたいでゼファ少年が息を呑んだ。

「おま……」

声を出そうとしたが声がかれていて音にならないようだ。
それに苛立ったように口をつぐんだものの彼からの視線は無くならない。
何で睨まれているのかがわからないんだけど、何かした？
……まぁ、何かしましたけど君は知らないよね。

「シトッテだよ。ゼファくん……って、どうしたの？」

蛇に睨まれた蛙の如くゼファ少年の前で固まる私と私を見ていたゼファ少年の様子に戻ってきたサラさんが首をかしげているようだ。
左手には木のカップを持ち、その視線は私とゼファ少年の様子をうかがっているのだがお願いだから少年の視線を逸らしてくれないだ

ろうか。
その願いが通じたのかゼファ少年の視線は外れ、サラさんから飲み物を受け取っている。
香りからしてフルーツを搾ってつくったジュースみたいだ。

「ありがとう」

喉が渇いてたからかすれてたらしい。
まだかすれは残っているもののだいぶ聞き取りやすくなった。

「うん、でも起きてよかった。この子がカランちゃんだよ。カランちゃんについて言ったことは覚えてる？」
「ちょっと……」
「よかった。まだカランちゃんはここに来たばかりで言葉を覚えてないから体調がよくなったら仲良くしてあげてね」

ねぇ、サラさん何を言ったの？頷いたゼファ少年からの私への視線が再開しましたよ？
別に威圧感を感じるとかじゃないけど理由も判らずに見つめられるのは苦手です。
目線が合わないように下を向けてしまったのは仕方がないと思う。

16

あれからすぐにゼファ少年は眠ってしまい私はサラさんに部屋から出され、ジョナお婆ちゃんと過ごした昨日と同じ部屋に案内されたが今日は一人で放置された。
少年が助かったとこの目で知ることが出来た今は不安感がないので、この世界にどうして私がここにいるのかとか色々と不安はあるけれど此処に華嵐となった私がいたことで救えた命があったことが一つの希望にもなっている。
彼の命が救われたことで今の私が肯定されたように思うからだ。もちろん選ばれた存在となったとか考えているわけではない。

『うん、そのはず』

そのはずだよね？と、自分の胸を押さえれば感じるのは少し速い心臓の脈打つ様だ。もしかしたら理性では違うとか思いつつも何処かで期待していたりするのだろうか？
調子に乗りやすいところがあると自覚しているのでここは自分はただの一般人であることを自分に言い聞かせておこう。調子に乗って危険なところに飛び込んで生き残る保証はない。
この身体が本来の私に比べると高スペックであることは認めるが中身はダメダメだ。だって、今思い返すと巫蠱以外にもゼファ少年を救う手立てが普通にあったことに気付いた。それも私自身があんな風に割り込むような必要がないものだ。
一つは木行の仙術で植物を薬草に変化させ解毒草に出来るものがあるがこれをルッツナにかければって私が見た時はすり潰されている最中だから無理だったかもしれないけど。そうだとしても禁呪で毒を禁じれば体内の毒が無効化されただろうと予測できるのでゼファ少年は実は苦しまなくていい苦しみの時間を過ごしたのかもしれな

い。
李華嵐は優れた巫蠱の仙人であると同時に禁呪もまた弟子をとれるほどの実力を持っていたのだから木行の仙術よりも成功したと思う。敵の仙術を禁じるぐらいしか使ってこなかったために浮かばなかったのだとしても逆にこれからはセッション中で使わなかった術のほうが使用頻度は高いんじゃないだろうか。
自分がした確認が満足できるようなものでなかったという事実にため息をついてしまったのも仕方がないと思う。
まず今の自分が何を出来るのかを細かく思い出さないと今後、取り返しのつかないことを起こすことになるかもしれないのだから。

「何を辛気くさいため息をついているんだい？」
「ジョナお婆ちゃん、おはよう」
「ああ、おはよう」

部屋に入ってきたジョナお婆ちゃんに声をかけられたので朝の挨拶をする。入ってきた彼女からはまだ新しい土の香りするのはその手に抱える真新しい植物のせいだろう。
見たことがない植物が混ざっており何だろうかと興味を向けて見ていると近づいてきた彼女はそれを私へと差し出した。植物を受け取って観察すれば六種で四種は昨日教えられた物で二種がはじめて見る植物……もしかしたら七種かもしれない。
見たことのない植物のうち葉の付き方や茎の様子からして同じように見えるけれど咲いている花、赤い花と白い花という違いがある植物は何だか違和感があった。
仙術を使用すればわかるだろうが何だかジョナお婆ちゃんが私を昨日よりも注目しているのでこっそりと導引は出来そうにはない。
ここは導引は諦めて口訣、音を発せずに唇の形だけでしようと植物に熱中するふりをして俯いて口が少しでも見えないようにして術を使用する。

一つ一つしなければいけないがまずは違和感を感じる植物二つを目標にしようと赤い花のほうを調べ、それが解熱効果があるものだと知った後に続いて白い花のほうを調べて動きを止めてしまう。
解熱効果のある赤い花の植物はレプト、白い花の植物はシェルソといい猛毒を持つ植物で特にその白い花弁に多くの毒をもち、花びら一枚で人間ならお陀仏確定なぐらいの猛毒だ。
良く似ているがまったくの別物であるその植物を何故に私は手渡されたのだろうかと思いつつジョナお婆ちゃんへと視線を向ければ彼女は昨日と同じように床に敷かれた布の上に座りその皺だらけの手で床を叩き。

「薬草」

薬になる草のことだと彼女の発した単語を理解できたが何を言いたいのかと見つめていると叩いた床から少し離れた床に手を動かしてそこもまた叩き。

「毒草」

害となる草のことを示すその言葉に彼女から薬草と毒草を分けろと言われているらしい。四種類は干からびたものであったが一度見たことがある物なので薬草と毒草に手早く分ける。
白と赤の花のものは教えられたことがないので間違えておくべきかわからないとたずねるべきか迷うので保留して残りの一つを調べることにした。
それは引っ掛けのようで薬草とも毒草とも区別するようなものではないようだ。さて、教えられていない草についてはどうすればよいだろうか？
少しばかり悩んだ後に私は手に残っている草を持ち、左右に分けた薬草を見比べ、ジョナお婆ちゃんへと視線を向ける。教えられてい

ない知識を持っているのはおかしいと思い、わからないというアピールをする。

「これは何ですか？」

「白い花の物はシェルソ、猛毒だよ。ただヴェゾーラという鳥の毒と互いに中和しあうから使いようだね。こっちの赤い花の物はレプト、熱冷ましとなる。乾燥させて保存しておけばかなり持つよ。それでこれがキュトスといい肉の臭み消しにする草だ。虫除けの香の材料にもなるね」

持っている草を彼女へと差し出してたずねれば彼女はやっと口を開いて説明をしてくれた。それは私が調べたことと内容は一致しているようで幾つかの理解している単語が聞こえたので頷いておく。こうした調べた知識とのすり合わせにより徐々に覚えている単語が増えていくのは面白いと思えるのはこの身体になって物覚えが恐ろしいほどによいせいだろう。

意識して覚えたことなら忘れることがなさそうだし、ただ人の話を聞いているだけでも何となく単語の区切りとか理解出来てきている気がするんだよね。

「シェルソ毒草、レプト薬草、キュトス違う」

言われたように分け、一つだけ別のところに置けば頷かれる。しかし、どうして私は彼女に薬草や毒草について教えられているのだろう？こちらとしては助かるけれど私は子どもの外見だし、言葉をお互いに理解出来ていないので普通はこのようなことはしない。

昨日は私が来たので構ってくれていたように感じていたが今は彼女の様子からして私の反応をしっかりと見ているみたいに思う。もしかしたら昨日のことで警戒でもされている可能性もあるけれどそういうのとは違うように感じる。

どうなってるのかよくわからない。ほんの少しばかり変わった態度に戸惑いを感じつつも様子見は続行なので私は与えられる知識をなるべく吸収するために大人しく彼女の話を聞いていた。あまり理解できていない言語を大人しく聞く。

「お前は本当に頭がいい子だね」

褒められたのだろうか？頭がいいという言葉はサラさんがよく私に言う言葉だ。

声の調子からして褒められていることが多いように思うので褒め言葉だとは推測していたけどジョナお婆ちゃんの様子からするとそれもまた疑わしい気もする。

眼を細めて私を見る彼女の様子からして、子どもを見るような微笑ましいものがない気がする。多くの皺があるその顔をじっと見つめ返す。

「教えられていない物は自分で判断するべきではないと考えるなどその歳では難しい。これはきちんと言葉を覚えさせたら教え甲斐がありそうだね」

何処か嬉しそうに笑った相手の様子に何故だか取り返しのつかないことをしたような気がした。実は何か私には不都合なことをしでかしたかもしれない。

「さぁ、ゼファを診に行くよ」

少年の名前が出た後に立ち上がったので彼の元に行くのだろうと思ったが扉の前に立ったジョナお婆ちゃんが振り返り私を見てきた。あれ、もしかして私について来るように行っていたのだろうか？立ち上がり近づけば彼女は少年の部屋へと向かいだしたので正解だっ

たらしい。
無事ではあるとは知っているとはいえど回復するまでは心配だし、私としては好都合ではあるけどサラさんといいどうして私と彼を会わすのだろうか？
そう疑問は浮かんでも問うべき言葉は浮かばないので一先ずはその疑問を脇に置いておく。

「ゼファ、調子はどうだい？」

先程の部屋へと来たけどジョナお婆ちゃんはごく当たり前のようにドアを開けて中へと入っていった。
部屋に入る前にノックとかしたほうがいいんじゃないかと思いはしたものの廊下で待ってるのも何なので慌ててついて行く。
サラさんの姿はなく部屋の中にはゼファ少年だけだったが彼は起きていた。それが元から起きていたのかジョナお婆ちゃんの声で目覚めたのかはわからないけどね。

「最悪だよ。お婆様、身体を動かそうとすると気持ち悪くなるのどうにかなんないの？」
「2，3日は続くだろうね。ドジを踏んだお前が悪いのさ」

ゼファ少年の不機嫌そうなその声にジョナお婆ちゃんが何か答えたがそれが気に入らないのか彼はため息をついたがその時に彼女の後ろに立っていた私に気付いて動きを止めた。

「しばらくは寝て過ごすことになるんだ起きてる間は面倒を見てやったらどうだい？」

ジョナお婆ちゃんが私の背を押したのでゼファ少年の真正面に私は立つことになる。

何故だか私によく注目してくる少年の前に出されても困る。私としては部屋の片隅で彼の様子をちょびっと見るだけでいい。

「……別にいいけど？」

「じゃあ、任せたよ。カラン、ここに居るんだよ」

名前を呼ばれたので戻るのかと思えば意外にも待機という指示が来た。だというのにジョナお婆ちゃんは出て行ってしまったので部屋の中には私と彼という二人きりの空間だ。

こちらとしては怪我人である彼に気を使わせたくないので別の部屋での待機を任されたほうがいいと思うんだけどな。

17

部屋に居るように言われたので少年が眠るまで大人しくしていようと考えて部屋にある椅子に座り、視線を彷徨わせる。
ゼファ少年を私が見ると彼は視線を逸らし、逆に私の視線が彼から外れている時は彼からの視線を感じて私が彼のほうを見れば逸らされるというのを何度か繰り返していた。
この調子だと気が張ったままで彼は眠らず体力の回復が出来ない。
ゼファ少年と視線が合った時に彼が緊張しないように次は愛想よく笑おうと決めて彷徨わせていた視線をゼファ少年に固定し、彼がこちらへと視線を向けた時に微笑む。

「……っ！」

私の微笑みを見た瞬間に彼は驚いた様子で勢いよく視線を逸らした。
何故に微笑んで驚かれなければいけないのかと思わず眉を顰めそうになるが彼は子どもだ。私は大人として余裕の態度をとらなければ……彼に見られて慌てた事実は私の記憶から消去しておく。

「寝なさい？おやすみなさい？」

寝る時によくかけられる言葉をゼファ少年にかければ彼は視線を私へと戻した。少し頬が赤くなっているように見えるのは熱があるのだろうか？　そうであるのならやはり眠ったほうがいいよね。でも、その前に水分補給がいいかな？

「喉渇いた？水飲む？」
「いらない……お前、気を使ってる？」

首を振られた時の返答で水を断られたというのは理解できたけど続いた言葉は解らなかったので首を傾げ。

「気を使ってる？何？」

別に意味を問いかけたいわけではなく私が彼の言葉を理解できていないということを彼に示したかっただけだ。

「わかんないんだったな」

それを理解したらしい様子の彼は困ったようだったけれど言葉を私が理解していないと知っても無視する気はないのか彼からの視線は逸らされなかった。

私としては会話が出来ないのだから興味を失って眠ってくれることが希望だったりしたんだけど彼は私への興味を失いそうにないし、椅子に座っていると少し離れているので椅子からおりてベットへと近づくがその間も私から視線はそれないのは何故だろうか。

「どうした？」

「何でもない」

「そっか」

何か用があるのか問われたので首を振り否定すればゼファ少年は頷いたものの頭をかいた。

ジョナお婆ちゃんにはこの部屋に居るように言われたけれど、この調子だと彼の回復の妨げになりそうだし部屋から出たほうがいいかな。

「立ってると疲れるだろ？ここに座れば？」

「……はい」

ゼファ少年は壁の方にずれてベットの端をあけるとそこを叩いて座るように促がしてくる。その誘いを断わることも浮かんだものの言葉も通じない子どもに興味を示してくる彼にこちらも興味が湧いたので素直にベットの上に座る。
この世界の文化は日本と違って室内でも靴を履いているので足はあげないままだったので彼に背を向ける形になったので彼のほうを見ようと身体を捻る前に彼が身体を起こしていた。何をするつもりなのかと彼の行動を見守っていると私の左足を持ち上げると靴を取って床に落とした。
そのまま右の靴も取ろうと思ったのか身を屈めてきたので体力のない今の彼にはそれは辛いだろうと彼が動く前に右の靴を外し、床に落ちた靴と共に揃えている間にゼファ少年はベットに横になった。

「あー、疲れた。こんなことで疲れるってどういうことだよ」

息を吐き出して何やら不満そうに呟いている彼の顔色を見ようと上から覗き込めば翡翠色の瞳に華嵐が映った。
今の私が映っているというのにそうは思えなかったのはまだ何処かで認めたくないという思いからだろうかとか妙な思考が浮かぶも深く考えることはせずに元の目的である彼の顔色を見ると少し青ざめている。やはり先程の行動は今の彼にとっては無茶な行動だったぽい。

「ゼファ、おやすみ」
「ちっこいんだから眠いよな。寝ていいぞ」

私としては彼に寝るように言ったはずだが彼はベットを叩いて寝るように促がしている。
これは私が寝たいと彼に言ったとでも思われたっぽいけど、私が寝

れば彼も寝ることになるのではないだろうか。
私に興味があるとしても寝てる人間をずっと見続けるとか普通はしないだろうし、そう考えて私自身もベットの上に横になり目を瞑る。そうやってしばらくしていると寝息が聞こえ出し、彼が眠ったのだということを知ったので私は目を開けて身を起こしてゼファ少年が眠っているか確認をしてから鈴華を呼ぶ。

『鈴華、居る？』
『ここに』

ちゃんとついて来てくれていたようでベットの下から小さな白蛇が顔を覗かせた。

『あのね。鈴華って回復する丹息を吐けたよね？』
『はい。そちらの少年に吐きましょうか？』
『何だか辛そうだし、少しでも体力回復の助けになるかなって……どうしたの？』
『少しどころか体力ならば全回復いたしますわ。精神的疲労は回復いたしませんけれど』

話している途中で鈴華の機嫌が損なわれた気がして言葉を止めて聞いてみるといつもより硬質な声で鈴華が答えた。
その答えを聞いて白蛇が吐く息が術者が作り出す丹と同等であることを思い出す。回復する丹としては最高のものである万金丹であり、効果は２Ｄ６＋術行使値であるのだから一般人であるだろう少年は全快するだろう。
もう一つの回復する丹である金丹も２Ｄ６のところが１Ｄ６になるだけの違いなだけなので結果の違いはないだろう。行使値を下げる方法はあっただろうかと考え自作仙宝を思い出す。行使値が低い丹を作ることは可能のはずだ。

『鈴華、人の姿に成れたよね？』
『はい。成れましたけれど？』

感覚共有の能力を最高である効果範囲を無制限にし、会話できるようにした後にとったのは人というか美女に成れる能力だった。
そのような偵察能力的なことを上げた後は何をとろうか迷って回復する万金丹の丹息、巨大化を取らせたのでバトル時にも行動できるという万能型となった子だ。

『丹を作るための材料を集めてきてほしいんだけど出来る？』

薬草を探すことも出来るだろうと聞けば、鈴華が首を傾げるようにその頭を揺らし。

『どうでしょうか？似たような効果のある植物があっても私にはわかりませんもの』
『うぅ、そうだよね』

鈴華の答えに気落ちするが彼女の返答は当然のことだとも解っている。
今までの植物を見ていると丹に使用できそうな気がする物はあるが正確なところはやはり調合しないと判らないだろう。
そう考えて使用できそうな植物を取ってきてもらうのは可能であることに気付き。

『それなら丹に使用できるかもって思った植物を探してきてもらうことは可能かな？』
『……教えて頂ければ』

確かに彼女は回復する丹息を吐けるかもしれないが当人自身が巫蠱でないのだから知識があるわけではないし、この世界で何が材料になりそうな植物であるかなど判断は出来ないだろう。

『うん、今度機会があったら……って、感覚を共有すればいけるかな？』

『可能だと思いますわ』

私は隣で眠っているゼファ少年の様子をうかがいまだ眠っているのを確認し。

『それじゃあ、今から行ってもらえる？』

『はい』

風通しのために開けられた窓から鈴華が出て行くのを見守った後に私はまたベットで横になる。

私の反応が多少遅くても眠っているからだと考えてもらえるだろうと私は目を瞑って意識を鈴華の方へと向けた。

18

感覚の共有は二度目ということで少しは馴れたのか自分自身のものではない視界で物を見る感覚にもあまり違和感を感じなかったのはよかった。
今後も鈴華の視界をかりるようなことはあるだろうし、この感覚を忘れないように必要がなくても時々は感覚の共有を行ったほうがいいかもしれない。
村から充分に離れたところで人の姿へと変化をしてもらうと鈴華の人の姿は元の私自身の身長とそう変わらないのか感覚共有での違和感が消えた。
理由として考えれば人と蛇という違いが違和感となっていたのかもしれない。そう思ったものの違和感がなくなるのは歓迎すべきことなので問題視する必要はないだろう。
人の姿に変化した鈴華の目を通して周囲を確認すれば丹の材料となりそうな植物を幾つか発見することが出来た。感覚の共有でも材料を集めることは出来そうだ。
そのことに安心して鈴華へとその植物を取ってくれるように頼めば彼女は手馴れた仕草で植物を採取し、根が必要な物は手近にあった枝で土を掘った。
道具が何もないなかで面倒だっただろうに黙々と作業をこなしてくれる彼女に感謝していると身体が揺らされたことで意識が鈴華から戻ってしまった。

「起きた？カランちゃん」

目を開けて声の方を見ればサラさんの姿が見えた。肩を揺すられていたらしく彼女の手が私の肩に乗っている。

「サラ、おはよう」
「おはよう。昼食の準備が出来ているから食べましょう」
昼食という言葉にもうそんな時間になったのかと思いつつも室内に自分と彼女しか居ないことに首を傾げる。ゼファ少年と一緒に寝ていたはずなのに彼の姿はなかった。
私だけ別の部屋に移されたというわけではないのは室内の調度品などが寝る前と同じなので推測できるけれど、彼の姿がないのはなんでだろう。
「ゼファくんを探してるの？彼なら先に行ってるわ」
彼の名と探すという単語によりサラさんは彼が何処に居るのか知っているらしい。
意識を他に移していたとしても容態が悪化したというような緊急事態であれば気付いただろうし彼は大丈夫だ。
昼食を食べるために移動する前に鈴華へと短いながらも意識を繋いで採取した植物を持って帰ってきてくれるように頼んでおく。
「あら？髪が乱れちゃったね」
ベットから降りるとサラさんの手が私の髪をすく、横になっていたことで髪が乱れていたのだろう。
彼女はパパと違って私の外見に気を使ってくれるので、近くに居ると彼よりも世話を焼いてくれるのでかなり恥ずかしい。
見た目は子どもだとしても中身は違うので、周囲との意識の格差というものに身もだえしそうになる。とはいえ、子どもだからこそ受け入れられている部分も大きいとは思うので多少の子ども扱いは許容するべきだ。

「ありがとう」
「どういたしまして」
何度か手ですくと戻ったらしく彼女が手を離したところで礼を言う。
鏡がないところでは自分の髪がどうなっているのかはわからないので助かった。
ＴＲＰＧの持ちキャラで異世界に来たというような異常事態ではあるけれど、こういう時こそ身嗜みには気をつけないといけない。
心の余裕がないと身嗜みには拘らなくなる。逆に考えれば身嗜みに拘る間はまだ余裕があるということだと思う。
「行こうか」
当たり前のように手を差し出されたので私はその手に自分の手を伸ばす。
「難しい顔してるね。カランちゃん」
呼ばれたので視線を向けると困ったように微笑んでいるサラさんと目が合い。
「カランちゃんは大人しい子なんだと思っていたけれど、ちょっと違うのかもしれないね」
名前以外の言葉が理解できなかったので首を傾げると彼女は空いた手で私の頭を撫でると歩き出した。
言葉が理解できないということはかなり面倒だ。こうした何気ない会話の時ですら相手が何を伝えたいのかわからない。
もしくは彼女は私が理解できないからこそ言葉に出したのかもしれないけど。

手を引かれて入った部屋にはテーブルの上に食事が用意されていて、ゼファ少年の姿もそこにはあった。

「遅いよ」
「ごめんね。ゼファくん」
「ごめんなさい」

遅いと文句を言ったっぽい彼に謝ったサラさんに続いて私も謝った。どれだけ待たせたのかはわからないし、起こされてすぐに行動はしなかったので責任はある。
体力が回復したとは言えない彼は座っているだけでも疲れることだろうと考え、どうして彼がここに居るのか不思議に思う。

「さぁ、カランちゃん」

ひかれたイスに座りサラさんも座るのを待つ。
ジョナお婆ちゃんの姿は見えないがこれは昨日も同じなので昼食は食べないか一人で食べているのだろう。

「日々の糧に感謝を」
「感謝を」

こちらの世界でのいただきます的な言葉の後にサラさんの料理を食べる。
少しボソボソする硬めのパンは美味しいとは言いがたいが、これは私の世界の食文化が発達しているからそう感じるのだろう。
素朴ながらも野菜が煮込まれたスープは美味しいし、パンはスープにつけて食べれば硬さは気にならない。
一緒に食事している二人もそうやって食べているのでパンの食べ方としては、これが普通みたいだ。

「なぁ、サラ姉ちゃん」

口が小さいからか私が食事を終える前に二人は食べ終わってしまいゼファ少年がサラさんへと話しかけている。言葉を覚える意味でも人の会話を聞くことも必要だろうとわからないなりに耳を傾けつつ、食事をする手を止めない。

食べなくても大丈夫だけれど美味しい料理を口に入れる機会があれば逃したくはない。それは華嵐としての戒律という決め事ではあるけれど元の私も食べることは嫌いではなかったからこそこの戒律を選んだので問題はない。

問題があるとすれば禁呪の戒律かもしれない。『義を貴び、律を守り、令に従い、理をもって行動すべし』理というものが一体何なのかを理解しているわけではない私には難しい。基本は人の嫌がることをしなければいいはずだと思うけど。

「ゼファくん、疲れた？」

「疲れてない。これぐらいで疲れるかよ」

「毒は中和されたっていっても体力は戻ってないんだから横になっていないとダメだよ。食事の時だけって約束したでしょう？」

何やらたしなめている様子のサラさんと抗議しているらしいゼファ少年。これは彼に身体を休めるようにとでも言っているっぽいな。そもそも彼がベットから起き上がっていること事態が不思議だ。普通であれば昨日の毒からして起き上がれなくても不思議ではないのに……そういえば彼の顔色はかなりよくなっている。

鈴華に意識を集中していたのは1，2時間ほどでその短時間の間で彼が回復したのは不思議だとゼファ少年を見ていると彼の姿にぶれるように何か薄っすらとしたもやのような何かが彼と重なって見えた。

見間違いかとじっと集中して見ているとやはり何かが彼と重なっているように見えてしまう。サラさんの方を見てもそんなことはない。

「本当に身体の調子はいいんだって」

「今は無茶してもいいことないよ。カランちゃんも見てるんだからワガママ言わない」

私の名前が出されたゼファ少年が黙ったので視線を向けると彼と目が合ったがすぐに逸らされ。

「わかったよ」

彼の様子からしてゼファ少年のほうが折れることになったっぽい。会話がひと段落したところで私のほうも食事を終えることが出来た。

『ごちそうさまでした』

無意識のうちに日本語で手を合わせて言うと二人からの視線が向けられた。

聞き慣れない言葉を話したからかもしれないが居心地が悪いので注目はしないでほしい。

「美味しかった？」

「はい。美味しかったです」

「そう、よかった」

何度かしたことがある会話なので頷いて答える。笑顔の彼女に微笑み返して木皿を重ねているとゼファ少年からの視線を感じたのでそちらを見れば目が合う。

今度は視線を反らされることはなかったが逆に目が合い続けられる

とどうすればいいのか困ったので笑いかけてみたが、一回目のときとは違って視線は逸らされない。

「どうかしたの？ゼファくん」

「……何でもない。横になってる」

サラさんとの会話のために視線が外れ、会話の後に立ち上がったゼファ少年の身体はふらつくことはなかった。
機敏なその動きから体力的にもかなり回復しているらしいことがうかがえるが本気で何が起きているんだろう。
この世界の人はもしかしたら私の世界よりも回復力が高くて回復が速いんだろうか？
信じられないほどの回復を見せている彼をじっと見つめているとまたも目が合ってしまう。

「行くか？」

手を差し出されてしまった。

「カランちゃん、ゼファくんを見張っててね」

サラさんの言葉の半分もわからなかったが一緒に行くことを推奨されているらしい。
イスから下り、ゼファ少年の差し出された手と手を繋いだ。すると彼と重なっていたもやのようなものが私の手首にまとわりついた。
これが一体何なのかはわからないが、どう対処すればいいのかわからない何かに触れられているのは不安があって、つい助けを求める視線をサラさんに向けてしまう。

「一緒にお昼寝しててもいいよ」

笑顔のサラさんは今の私の現状を理解していないようだ。
言葉で説明出来ない私はドナドナを心の中で歌いながらゼファ少年と共に部屋を出た。

19

私の手に纏わりつく白いもやは何だろう。ゼファ少年から出ているようだけれど奇妙だとは思いながらも危機感はあまりない。
当初は焦りはしたものの白いもやが私を害するものではないようだと認識出来たのはまとわりつくだけで他に違和感がないからだ。
ゼファ少年と共に部屋に戻り、彼が手を離してベットへと座ることで距離があくと名残惜しそうに白いもやは私から離れていく。

「なぁ、見えるのか？」
「何？」
「わかんないか」

何かを問われたのは理解できたが彼が何を問うたのかは理解出来なかったので大げさなほど首を傾げてみせるとため息をつかれた。
あからさまなその態度に少し思うところがあったものの、彼の表情が暗く見えたのでどうしたのか視線を向けていると彼はベットの上に横になったものの頭を抱えて転がりだした。

「あーっ！何かわかるかと思ったのにな」

唐突なその行為に驚きつつ、他に妙な行動をしないかと彼を見守っていると叫んだ後に彼は上半身を起こし。

「この白いヤツ、気づいたら俺から出てたんだよ。気のせいかと思ってたんだけどさお前も見えるみたいだし、お前が寝てた時に出てきたっていうのにお前は話せないとか」
「ごめんなさい？」
「……別に」

勢いよく話される言葉を私は理解できないが何やら責められているような気がしたので謝っておく。
それで相手が納得してくれるのなら楽だということなかれ主義から出た謝罪だったが、彼の勢いは衰えたようなので目的は達成されたと言えるかもしれない。

「親父に聞けばわかるか？」

何事かを呟いた彼の身体から白いもやみたいなものが出たり入ったりと繰り返している。それは彼の動きに連動しているようには見えず、何らかの別の存在だったりするのかな。
白いもやは彼にも見えているみたいだから、私がこちらの言葉をもう少し理解出来たら聞いてみてもいいかもしれな……考えごとをしているといつの間にかゼファ少年から見られていた。

「何？」
「ちょっと来い」

来るように言われたので彼が居るベットへと近づくと頭に手を置かれた。何がしたいのかと視線を上へと向けると彼の手や腕から白いもやが出てきて私のほうへと広がってくる。
意味不明すぎる現象に逃げ出したい気持ちになったが、そんなことをしているゼファ少年も困惑しているみたいなのが続く行動をためらわせた。
ここで逃げ出して彼に何かあったら私は自分を許せないだろう。直接的な命の危機を感じたとかだったら仕方が無かったと誤魔化せるかもしれないけど、そもそも今の私の身体は華嵐であり、危機的状況であるのなら本能的な何かをきっと感じるはずだ。そうだと信じて今のところは大丈夫と判断しよう。

「元気になってるのか？」

彼の視線は白いもやに向けられているが、いつの間にか白いもやの動きは活発化している。もしかしたら彼と私が傍に居るのは不味いのかもしれないと思い私が後ろに引いたのと彼が手を上げるのはほぼ同時だった。

『うわっ！伸びたっ！』

開いた距離を物ともせずに白いもやは私と彼を繋いでいる。

「何だこれ？」

『待って、もう本気で待ってっ！動かないで！』

ベットの上に立ったゼファ少年は白いもやが出ている右手と私の頭を交互に見ていた。その様子からして今の状態は彼にも理解出来ていないことだとわかったが、事態の収拾には結びつかない。

白いもやと離れるためにベットが置かれている壁とは反対側の壁へとへばりつきつつ、白いもやへと中国語めいた央華の言語で言葉をかけた私はかなり焦っていたと思うが、白いもやはその言葉を発した後は動くのを止めた。

空中で戸惑うように左右に揺れる様子は、親に置いていかれた子どもであるかのように頼りなく感じさせる。

「止まった？」

二人して部屋の中央付近で止まっている白いもやの先端を見つめていると。

「ゼファ君、カランちゃん、どうしたの？」

いきなり開いたドア、そこには慌ててこちらへと急いできたのだろうサラさんの姿があった。
彼女の視線の動きは部屋の中央で揺れている白いもやに向けられずに私とゼファ君を見ているだけだ。

「なっ、何でもない。ちょっと追いかけっこをしただけだよ」
「追いかけっこ？ゼファ君、身体を休めないとダメって言ったでしょう？それにカランちゃんはまだ小さいんだからゼファ君に追いかけられたりしたら驚いちゃうでしょ？」
「ごめん。もう追いかけっこは止める」

サラさんはゼファ少年の言葉に注意をしているようだが今回の事態を把握しているんだろうか。
言葉を理解できないということは蚊帳の外に置かれているに等しいと感じながら、二人と白いもやの先端を視界に入れていると白いもやはゼファ少年へと戻っていく。それを彼も理解しているようで自分の中に吸い込まれるようにして戻っていく白いもやを見つめている。

「ちゃんと横になってね」
「えっ？あぁ、うん」

ベットへと横になる彼に壁へとへばりつかせていた背中を離す。

「カランちゃん」
「はい」

名前を呼ばれたのでサラさんのほうへと近づいていくと手を差し伸

べられたのでためらいつつもその手を握る。

「今度は私と一緒に居ようね」

「ちょっと待ってソイツ連れてくなよ」

私の手を引いて外へと連れ出そうとしたサラさんがゼファ少年の声に動きを止め。

「ゼファ君、身体を休めないんだもの」

「休めるから」

「どうかな？村にゼファ君より小さい子が今まで居なかったから遊んであげようと思ったのかもしれないけど」

「少し話をするだけだって」

ゼファ少年は何やら必死に訴えているがそれを聞いているサラさんの表情は厳しい。

もしかしたら先程、私達は騒いでいたのでサラさんは注意しに来たのだろうか。特に私はこちらではない言葉で騒いだ記憶がある。声の大きさならゼファ少年より大きかったように思う。

かなり恥ずかしいとは思うもののこのままだとサラさんに私はこの部屋から出されるだろう。あの正体不明の不思議物体とゼファ少年を一人残すのも心配だ。

「どうしたの？」

私は彼女の手を引いた後に握っていた手を離し、サラさんの手から自分の手を抜くとゼファ少年の方へと近づきベットの上に乗る。

「カランちゃん眠いの？」

「はい」

別に眠くはないけれど寝るという意思表示のために彼の隣に横になると白いもやがまた出てきた。
正体不明のこの白いもや、今のところは気分以外は特に害があるようには感じていないので我慢する。

「コイツも一緒に居たいみたいだし」
「もう……カランちゃんを起こしたりしたらダメだからね」
「うん」

扉を閉めて部屋を出ていたサラさんの気配が離れるのを待ちながら自分の身体に伸びてきた白いもやへと手を伸ばす。
触れることは出来ないようで貫通し、もやが動いて伸びている指先まで包んでいく。手をかき混ぜるように動かすがもやは微動だにせず、煙のように空気の動きで流動するようなものではないらしい。
これ、本当に何なの？　サラさんに見えず、ゼファ少年の身体から出てきているのに彼は白いもやの行動に驚いているみたいだしさ。
意味わかんない。

20

謎のもやの正体に頭を悩ませながら腕を動かしているともやがその動きについてくる。私はベットから立ち上がり離れてみると白いもやはためらうように揺れた後ついてきた。

「どうした？」
「何でもないです」

どうかしたかという問いに問題ないと答え、私は白いもやについて観察する。部屋の中を歩いて白いもやから距離を置いたりしながら白いもやの動きが速くなっていることに気がついた。
ゼファ少年の中に白いもやは居るもしくはあるが、何故か近くに居ると私のほうへとやってきてその距離は時間の経過と共に伸びているらしい。
サラさんには見えず、少年と私には見えている実体が無いらしき白いもや。これは怪奇現象というものじゃないだろうかと思い当たったと同時にそれに恐怖心を抱かない自分を疑問に思う。
私自身の人生において幽霊やら宇宙人やらといった不思議体験をした記憶は無いし、剛胆といったわけではないのだから怯えて当然のはずだ。
――…いいや、私は知らなくても華嵐は知っている。人でないものの存在を、人に宿る魂魄が肉体を失った後も鬼となって現世に存在することがあることを。
そんな存在が悪しき者でないのであれば恐れる必要などなく、目の前の白いもやは陰気を感じさせるものではないと肌で感じることが出来た。

『うわっ、これ本気でヤバイかも』

恐怖を微塵も感じない今の事態に一つ問題が出てきた。意識のベースは私であると考えていたがそれすらも華嵐である可能性が出てきたからだ。
華嵐と私との大きな違いは華嵐は知識欲のために修行と称して旅を続けていたからだ。今のところ、私も彼女も知らない異世界だからこそここで得られる知識で満足しているかもしれないが、目新しいものが無くなって旅立ちたいと考える可能性もある。
下手な好奇心は抱かないほうがいいと自分をなだめて生きるような人生にはなりたくない。ああ、いや、そう考えている時点で今のところは私と思っていればいいのかな。

「おい、気分でも悪くなったのか？」

考えごとをしているうちに俯いていたようでそれを心配したらしいゼファ少年が私の顔を覗き込んできた。部屋の真ん中で突っ立て無言で俯いているとか確かに心配になる光景だったことだろう。
もう一度、何でもないと答えようとして白いもやが２０センチほどの人型っぽい何かになってゼファ少年の後ろに浮いていることに気づく。

『なにこれ？』
（力、戻った）

何か異変が起きるにしても勝手に進行せずにこちらが観察している間に起きて欲しい。

（……）

ふるふると小さな人の形をしていた白いもやは形が崩れ、先程と同

じような白いもやになったかと思えばまた集まり人の形となった。

『何したいわけ？』

（見てた）

見てた。それが何だと思いかけて頭の中に入ってくる声なき声と白いもやの行動を結びつける。

白いもやらしき声なき声は私の言葉に反応している。いや、人型を解いた時は私は思っただけで何も言っていない。

この白いもやは人の思考を読むのだろうかと警戒心がわいてくると白い人型はふるふると身体を震わせているが今度は形を崩さなかった。

「何見て……って、何だよ。これ」

ゼファ少年が私の視線が自分を見ていないことに気づいて振り返り、自分の背後に居る白い小さな人型に気がついたみたいだ。

「はっ？お前、精霊なの？」

何やら驚いたようにゼファ少年が白い人型に向かって何か喋っているが驚いたらしく声が少し大きくなる。

変な存在だけど私の言葉もしくは思考にそった行動をとろうとはしてくれたようなのだから悪いものではないみたいだけど。

「普通、精霊って見えないはずだろ？……加護？加護って俺に精霊の加護がついたのかっ！」

いきなりの興奮した状態となった彼だが、そんな大声を出すと……ああ、ほら部屋の外から足音が近づいてくる。

私は白い人型と会話しているらしいゼファ少年から離れてベットの上に横になって避難完了だ。いい歳して叱られるのは嫌だし、騒いだのは彼だ。

「ゼファ君っ！大人しくしてなさいっ！」

ノックもなく開いた部屋のドアとサラさんのお怒りの声、私はその一部始終を薄っすらと目を開けて反応を見ていた。
十センチは飛び上がったゼファ君と人型を散らした白いもや、ゼファ君はともかくとして白いもやは自分を見えていない相手への反応としては弱すぎないだろうか。

「えっと、ごめん。でもさ」
「でもじゃないでしょう？カランちゃんが起きちゃうじゃない」
「いや、寝て……って、寝たふりしてるし」
「ふりって」

二人の視線がこちらに来たので私は目を瞑り自然な呼吸を試みる。病気ではない人がどんなふうに眠っているのかを思い浮かべて実践する。
それはおかしなことで正しいことだった。華嵐が診てきた多くの人々を知らない私が自らの知識として持っているのだから。
最初の頃よりも私は華嵐の知識を意識せずに思い浮かぶようになっていて、信じられないほどに心は落ち着いている。
世の中というものは理があり、物事はその理によって導かれるものであり今この時も何らかの理に導かれたのだろうと納得していた。
それが私と彼女の世界が混じわり、異なる世界で少年を救うというだけの意味であったとしても充分なのだと。

「眠ってるわ」

「えっ？……うわっ、こいつ寝つきよすぎ」
覗き込んでいる様子の二人に眠ったふりをし続ける。寝たふりばれたら叱られるかもしれないので必死だ。疑われたとしても乗り切ってやる。
「ゼファ君とは違ってね。体力回復するためにも休まないと……」
「体力なら回復してるよ」
注意をしているらしいサラさんの声と不満そうなゼファ君の声。
「何を言ってるの。昨日の今日でそんなことあるわけないでしょう」
「本当！だって、俺。精霊の加護をうけてるんだぜ。なぁ？」
（頑張った）
何かを頑張ったと訴える白いもやに気になって薄目を開けて様子をうかがう。二人はこちらに注意を向けていないので無事に観察出来そうだが、ゼファ少年の右肩の上の辺りで浮かんでる小さな白い人型は私に気づいたようで寄ってこようとする。
サラさんはともかくとしてゼファ少年はその動きに気づく。近くに寄ってこないようにと願っていると白い人型は動きを止めて左右に揺れた後にゼファ少年の右肩へと戻っていったのはこちらの意思を理解したのだろう。
あの白い人型はゼファ少年とも会話している様子はあったがその返答は私には聞こえなかった。そして、私と意思疎通をはかっていた時に気づいていなかったということは彼はその声を聞こえてはいなかったのだろうと判断できる。
「精霊の加護ってそんなこと」
「あるんだって！ここに居るんだよ」

（在る）

ゼファ少年が白い人型を指差し、それに答えて両手を振る人型の仕草は子どもみたいだ。
彼もしくは彼女の声が今は聞こえるが状況的にはサラさんに向かって話しかけているっぽいんだけど。

「見えないよ？」

目を細めたり、彼が指差したあたりに手を伸ばすサラさんだが白い人型は伸ばされた手から逃れる。

「あっ、逃げた」
「逃げたって、私には見えないみたいだし……ジョナお婆ちゃんに話してみよっか。から元気だって言われたら寝てるんだよ？」
「本当に居るのに。まぁ、おばば様がわかってくれるならいいか」

部屋を出て行く二人と小さな白い人型。二人と一匹？の姿を見送ってから起きていてついていくべきだったかもしれないと思ったものの、今更かと中断してしまった感覚共有を再開することにして目を閉じて意識をそちらへと私は移した。

21

意識を鈴華へと移した瞬間。今までにない緊張を感じて戸惑いを覚えたが状況の確認のために身体の動きは鈴華に任せたままに視界と聴覚を共有する。

目に映ったのは歩きなどではなく走っている速度で動く景色、後ろからは複数の荒い息遣い。何かの追われているのだと判断し、それは何だろうと考えると鈴華が振り返る。

見えたのは額に角を持つ目つきの悪い狼に似た四足歩行の動物、１メートル近い大きさはあるように見えるがそれが何頭か、確認出来たのは４匹が鈴華を追っていた。私の知識にも華嵐の知識にもない生物、それは鈴華も知らない生物であるということでもある。

狼に似た生き物のほうが速いようで鈴華から一定の距離を離されることはなく、鈴華は抱えた薬草を落とさないように走るがゆえにそれを容易にされてしまっているようだった。

鈴華が普通の生き物に負けるとは考えられないが、この世界を知らないがために彼女を追う生き物が脅威ではないとは言い切れず、同時にすぐさまこちらに戻ってくるようにという意思を送ることも出来ないのは野生の獣、肉食であろう生き物の群を村へと誘導できるはずがないからだ。

彼女から伝わってくるのは困惑だろうか。薬草を持ち帰ろうとしているからこそ両手に薬草をいまだ抱えたままなのだろう。本性である蛇へとなれば狼のような生き物の目から逃れることは難しくはないはずだ。草の中に隠れてしまうだろう小さな白蛇を狼がわざわざ襲うとも思えない。

そうなれば薬草を諦めることになると鈴華は人の姿のままで逃げ回っているようだが、追いかけてくる生き物は諦めが悪いようで彼女を追い続けている。もしかしたらスタミナ切れを狙っているのかもしれないが彼女は人の姿であろうとも一日中駆け回れるので無駄だ。

狼のような生き物のほうが息が荒いのであちらのほうがスタミナは先に切れるだろう。
ただスタミナ切れを狙って鈴華を走らせ続けるのも悪い。薬草を捨てて元の姿に戻ればこのような追いかけっこは終わるだろうと薬草の破棄を鈴華へと伝えようと考えたところに風を切る音が聞こえた。音が聞こえてきたのは左手後方、鈴華を追っていた生き物で一匹の腹に見事に矢が刺さっていた。音の正体はその矢が射掛けられた音のようだ。打たれた一匹は矢の勢いで倒れはしたものの生きてはいるようで起き上がろうとしている。
第三者のものである矢の登場に狼っぽい生き物達はこちらを追いかけるのを止め、矢を射掛けた者のほうを向き唸りだす。

「おいっ！こちらに来い！」

牽制するように生き物達の前に打たれる矢と来るように告げる聞き覚えのある声にややこしい事態になったことを理解させられた。
鈴華がその声に従うようにそちらへと向かったのは、声の主が言ったことを理解したわけではなく声の主がパパさんであることに気づいたからこその行動だろう。
何かあったときには庇うつもりだろうし、怪我をしたとしても回復しようと考えているんじゃないだろうか。
鈴華の生命値は上げているので多少の攻撃では死なないはず……いやいや、悠長にそんなことを考えている場合じゃない。
私は鈴華から意識を自分の身体へと慌てて戻す。先程目を閉じた時と変わらずに私以外には誰も居ないままでそれは今の私には都合が良い。

『壁を禁ずれば、すなわち遮ることあたわず』

華嵐が覚えている洞統の一つである禁呪の仙術を一つを私は行使す

る。
効果は壁を素通りできるというもの。そこにあるはずの壁を私は通り抜け、術の効果が切れる前に走り出す。

「……ごめんなさい」

私が居ないことに気がついたら心配かけてしまうだろうと謝罪を呟きながらも足は止めずにパパさんの家へと急ぐ。
本当は少しでも早くパパさんと鈴華の元に向かうべきだとは思うが、何も準備もしないままなのは怖い。華嵐が着ていた仙衣を私は取りに戻った。
クローゼットにしまわれていた仙衣を取り出し、今来ている服の上から羽織って禁感帯を結び袖の中の確認をする。
一度はサラさんに洗われたはずなのに変わった様子の無いそれ等にふと疑問に思い。仙骨の無い者は衣の袖から物を取り出せないし、仙衣のいたるところに仕掛けている丹の材料も水に濡れたところで問題はないと思い出すことが出来た。
そして、重要なことにも気がついた。この仙衣に巫蠱として丹を作るための材料を仕込んであり、慌てて鈴華に薬草を採取するように頼むほどの事態ではなかったということに。

『ああ、もう！ごめん。鈴華』

どれだけの知識を私は把握しきれていないんだ。それは私でなく共に居てくれる鈴華を危険にさらしてしまった。
命を護ること出来るはずの仙宝すら一つも彼女に渡していないなんて馬鹿過ぎる。その愚かな失敗で彼女を失うことのないように必死に考える。
浮かんだ物は時流転化旗、短時間の時を戻し僅かな時間であれば時すら止める仙宝。時を止めたものに対して直接的なことは出来ない

が使用者のみ自由に動ける道具。
導引を結び、ひと振りすれば私以外のものの時が止まる。その止まった時の中で動くのは私だけであるという奇妙な感覚に背筋が震えたのは自分の手の中にある強力すぎる力の所為だろう。
その震えを私は振り払う。怯えは術の行使を妨げると私は知識から知ることが出来たからだ。

『もう一回』

時流転化旗で止めていた時間が動き出してしまった。慌ててもう一度時を止める。今は少しでも早く鈴華の元に行かなくてはいけないけれど私には乗騎や載せてくれる使役獣はいない。
そもそも旗で止められている間は私以外に動けないのだから意味がないことだ。私自身しか動けないことに頭を悩ませて、移動する術があったことを思い出す。
一つは道具が必要だが風水・卜占の仙術には必要なく視界内であれば瞬時に移動できる術があり、何度か繰り返せばただ走るよりも早く鈴華の元へとたどり着ける。

『我、空の理を知り、身を移す』

時流転化旗と我空理知身移の術を行使し、鈴華が居ると感じる場所へとごく僅かな時間のうちに移動する。
彼女を視界で鈴華とパパさんが４匹から増えて１０匹以上の狼もどき達に囲まれていることを確認できるところまで移動できると呼吸を整え止まった時間が戻るのを待つ。
鈴華を庇うように剣を構えているパパさんと未だ薬草を抱えている鈴華。止まっていた時間が流れだすと共に二人への包囲を狭めていく狼もどきに向かって私は仙術を行使する。

『足を禁ずれば、すなわち歩くことあたわず、すべて』

央華の仙術は視界内であれば効果を発揮するものだ。異世界の生き物に対して効果があるかは今回がはじめてのことだったけれど、術は狼もどきの足をその場に縫いとめた。

急に止まった狼もどきにパパさんが視線を向けているが、鈴華の視線は私へと一瞬向けられるがすぐさま隠れるようにと彼女から合図をされ、私は木の影に隠れる。

鈴華の合図をすぐさま理解できたのは、この世界に来て仙術を使えるかどうかを恐る恐ると確かめていた時とは違い華嵐の知識をタイムラグなどなく引き出せているみたいだ。

「一体、何が？……まさか、君がしたのか？」

戸惑っているようなパパさんの声に隠れていた木から顔を覗かせて確認すると彼の視線が鈴華へと向けられていた。

何を言われているのか鈴華は理解出来ていないようで、小首を傾げたが止まったままの狼もどきを一瞥した後に比較的開いた包囲網の隙間のうち牙の届かないところを選んで抜け出し。

『ついて来て下さいますと助かるのですけれど……』

「何を言っている？」

振り返った鈴華の言葉を、パパさんがわからないと言っているのが聞こえてくる。ここで私が姿を見せたところで事態は好転しないだろう。

数日では法則性すらわかっていない言語のうち幾つかを知っているに過ぎず、通訳など出来るはずもない。

『さて、困りましたわね』

両手に薬草を抱えた鈴華のため息混じりのその声が聞こえ、私は申し訳なく感じた。彼女が私に姿を隠すように示したのは私が平穏にこだわり、ここで過ごそうとしているのを理解してくれているからだと思う。
私は術で今の状況にあったものはないかと仙術を思い出すが道具の必要のない術に短時間の記憶を誤魔化すものはあるが濁業が増してしまう。
そうだ。ここはパパさんを眠らせてしまうのはどうだろう？　今の鈴華では運べなくても元の姿で巨大化してもらえばパパさんを運べるはずだ。
必要なのは睡眠の香薬。袖をふり必要な分量を右手で擦り練り上げる。この体が何千回、もしかしたら何万回と繰り返した動作。
練り上げた丸薬を親指と人差し指で持ち、息を吸うことで気を身体に取り込み指で丸薬を擦り潰し、手のひらをパパさんのほうへと向けて息を吐く。

「くっ……」

効果は発揮されたようでパパさんは小さく頭をふったがその場に崩れ落ちるように倒れた。

『睡眠の香薬でございますね』
『うん』

隠れていた木から姿を現して私は鈴華の元へと近づくと狼もどきに唸られた。
足を止めているだけなので狼もどきはこちらへと顔を向けていたり、動こうと身体を揺らしたりしている。

『この獣達も眠らせてはどうでしょう？』
『あー、うん。そうだね』

近づいて飲ますのも微妙なので睡眠の香薬を狼もどきの数分だけ繰り返し作り息を吹き、足の動きを禁じていた術を解く。
睡眠の香薬で与えられるのは深い眠りではあっても通常の睡眠だ。放置していても問題はない。
足の動きを禁じた術の方は放置したままだと濁業が堪っていく仙術なのでこちらは解いておかないとね。知らないうちに邪仙化とかになったら笑えない。

『パパさんを連れてくる』

巨大化した鈴華ではパパさんに近づくときに狼もどきを起こしてしまうし、人の姿の鈴華では私のほうが力があるはずなのでパパさんの元へと近づき、念のために力を増す丹である怪力丹を作り飲み込む。
何とか足を引きずらないように抱え上げようとしたところで自分の行動の馬鹿さ加減に気づく。自分の身長とパパさんの身長から考えると、どこか引きずって運ぶしかなくそんなことをすればただ眠っているだけのパパさんは起きるだろう。

『華嵐様、私に怪力丹を下されればその方をお運びいたします』
『はい』

狼もどきの間をぬって近づいてきた鈴華に彼女が来るまでに作成した怪力丹を渡し、代わりに採取してもらった薬草を貰い袖の中に入れる。
袖の広さなどは考える必要はない。仙人の衣の袖はとあるネコ型ロボットの四次元ポケットのようなものになっている。

あまり多く入れ過ぎるとすぐさま取り出せないという問題があるので、本来はするべきことではないけれど今は手に持っているほうが不便だ。

『どう致しますか？華嵐様。私は今の姿では怪力丹がなければこのように運べませんし、本来の姿では巨大化してもこの方を起こさず運ぶのは難しいでしょう』

ガタイのいいパパさんを見た目、文句なしのアルビノ美女がお姫様抱っこで抱えて運んできたのに不謹慎だが噴き出しそうになる。

『……私が一緒に乗って支えれば大丈夫だと思うんだけど』

噴出すのを堪えて返答したが鈴華は私の言葉に賛成していないようで。

『華嵐様がどのような状況でこちらに来られたのかはわかりませんが、あちらはよろしいのでしょうか？』

『一人の時に抜け出してきたから早く戻ったほうがいいかな』

『それでしたら私に怪力丹を複数ご用意くだされば村の近くまでお連れ致しますわ』

『ありがとう。そうしてくれると助かる』

なるべくたくさん必要だと判断して少しばかり気合いを入れて怪力丹を複数作り出す。

材料だたけでなく込める気によっても丹の数が増減するが今回は気合いがかなり入ったようで六十個もの丹を作り出してしまった。

それを一呼吸のうちに作り出してしまうことが出来たことに仙人のでたらめさを感じつつ。

『六十個出来たよ』
『それではこの方を背負いなおしますのでお手伝いください』
『了解』

パパさんを一度下し、念のために睡眠を持続させるために今度は睡眠の膏薬、塗り薬を作りパパさんに塗ってから鈴華に背負ってもらう。

『半分ほど怪力丹を頂けましたら安全なところまでお運びできると思います。その後はこの方がお目覚めになられるまで元の姿に戻り傍に』
『三十だね。鈴華も気をつけて』

流石に六十粒は多すぎたみたいだ。効果時間は一粒で一分、鈴華が必要としたのは半分なので三十分。

『はい。それでは』
『あっ、待って鈴華』

私は次々に違う効果がある香薬を作り出す。鳥避香薬、虫避香薬、獣避香薬で効果はそれぞれ鳥、虫、獣が避けていく仙薬で効果時間は1日と長い。

『これで鳥、虫、獣は避けていくはず』
『ありがとうございます』
『ううん、最初からこうしてたらよかったよね。ごめん』
『いえ、私のほうこそ華嵐様に進言するべきでした。申し訳ありません』

鈴華が悪いわけではない。華嵐はこういった避丹とつく系統の仙薬

を作ることは少なかった。
普段の山歩きの時は華嵐としては虫や鳥獣がいることはごく自然なことであったから避けるものではないため、セッション時はそんなことをわざわざロールプレイすることが面倒なので気にしたことはなかった。それゆえに山に入る鈴華に何もしないままに入らせた。何が起きるのかわからない異世界で気をつけすぎても充分じゃない世界で、私は自分の安全を確保しながら鈴華を放り出したんだ。

『私が悪いんだから謝らないでよ。じゃあ、後はよろしくね』

私は時流転化旗と我空理知身移の術を行使してその場を鈴華からすれば一瞬にして離れる。
移動中はほぼ時間を止めていたために実際の時間としては三十分も経ってはいないのだろう
パパさん家に仙衣を置いてから戻ったのに、サラさん達はジョナお婆ちゃんのところにまだ居るようで私が村を離れていたことに誰も気付かれていなかった。
そのことに安堵しながらも、パパさんをまだ背負っているだろう鈴華のことを考える。今回のようなことを続けていたら、彼女に見捨てられるかもしれない。
そうでなくとも信じてもらえなくなってしまう。今の私には彼女だけが唯一の味方、その鈴華を失わないようもっと考えて行動しないと……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4273r/

陰に眠りし陽に微睡む

2011年10月21日09時03分発行